古史徵

開題記

一秋

太政官文庫
和書
門
類 八五〇一
號
函 九三
架 三
冊 一一

内閣文庫
和書
類 八五〇一
號
函 一四三
架 一二
冊 一一

内閣文庫
番號 和 8501
冊數 11 (3)
函號 143 431

国立公文書館
National Archives of Japan

内務省圖書
第百六十八番
號　部
冊　五

国立公文書館
National Archives of Japan

明治廿年購求

古史徵一秋之巻

開題記目録大意

山崎篤利謹記

○上件三典ハ添讀ばかり書等ハ論上六

此條ハ上件論ひたる諸祝詞ハ日本紀古事記姓氏録
ハ事實を熟く明かせむとて專と讀ばかり書ども續日
本紀ハ以下の國史ハ類聚國史の事風土記乃事ハ
よび出雲常陸肥前豊後ハ風土記ハ逸文の
事をばかり古風土記ハ成る由を辨ず信友主乃説ハ挙て
古風土記の御撰にくきぐ由ある事因て古く老者ハ尊め
ふ事乃論ひ其より總國風土記の事ハおよび此の記ハ出来
たる時代乃考因て伊勢風土記抄伊賀史伊勢史などハ
事ハ論ひ中て俗ハ律令家ハ稱たるハ徒古の記て令式
ハ制ハ符ざる事も有ハ偽書ありとて用ざるハ固
陋なる事の論ひ又民部省圖帳乃事國名風土記乃事中
て大八洲記を始め國地乃事記せる書等ハさざ○中て舊
事紀ハも採べき古事なる事中ハも天孫本紀國造本紀ハ
正しく古書なる由を論ひ○さて令式格律の事にハ

弘仁格式序より本紀まで、推古天皇の御世に聖德太子乃十七箇條憲法を作り、冠位を給ふる、漢風の制法の始めなり。此時を以て冠位の事も肇まり、世人ふ漢意佛意を移し、種々乃弊を行ひ、其弊を直し給ふ事、中臣鎌子連の謀を用ひ給ふ事、孝德天皇乃御世より鎌子連の奏によりて、漢風の嚴しき制度を設け、唐土乃制を改めて左右大臣乃廢えて、大臣大連を置き、神代より乃傳へ來る世職を改め去り、外戚乃郡縣の制を改め、内臣を置き、神世より諸氏乃繼仕奉る事、因みに上代ふ内外乃補佐乃臣まちの供奉まつる狀を論ひ、はと孝德天皇の御代に、新ふ八省百官をおき、其乃狀にて天智天皇の大津宮に始めて唐土乃律令の書を刊定めて作られ、鎌子連を近江令とりふ事、此御代なり。太政太臣の始まる事、天武天皇持統天皇二御代あり。文武天皇の御代に、はと更に撰定め給ふ。大寶乃古今古律とりふ。此御代に、令乃字乃成まる。今乃位階と成まる事、また因みに近頃成まる冠位通考を、養老令とりふ事、稱德天皇、桓武天皇、嵯峨天皇の御代ふ修正更ら給ふ。

ども少なく、刪定られ、にて淳和天皇の御代ふ、今傳はる令義解乃成まる所以を、天長三年乃太政官符、また義解の序によりて解き辨ふ因ふ官符を讀む心得のまと、にて常乃印本塙本ふとも、令集解唐六典、また逸令とりふ物乃事まで、を辨ふ。○にて律疏乃事にれ、び、此ふ添讀べき金玉掌中抄、裁判至要抄、法曹至要抄、唐律疏義の事ふ、また逸律とりふ書の事まで、を論ひ、にて令律の總論にふ、また俗ふ律令乃學ふまる徒の僻説を辨ふ。上代乃制度ふ事ふ、また及び國造ふ品ぐ、ふ別ありし事、また漢國の古へ封建乃世ふ諸侯をりふ物乃ふと、また我が上代ふ諸氏乃諸職ふ仕へ奉まる階級の狀、漢國ふて世官を非とする、ふ却て非ふ論ひ、令に建らまりふ職員ふ事、また宦名ふ古ふるると、後ふ漢ふふ別ある事ふ、また官職秘抄、職原抄、百寮訓要、官職難儀ふどの事、近頃にて來まる職官志とりふ書の事ふ、また令田令賦役令を始め、また令ふる制度の條乃論、伊藤長胤が書等の事、にて郡縣の制度ふ早く廢まて、舊ふ封建の趣ふ復まる事、また漢國乃封建ふ舊ふ復まる難き由ふ事を論ひ、○にて格式ふ興ふ成まる由を論ひ、弘仁格式序ふ解ふ其解乃中ふ、桓武天皇ふ政治に御心を用ひ給ふ事、交替式ふ事、また此格式の成まる年月のまと、また

因て後作の日本後紀の事あゝ幾も論ひ。さて右の序ハ。格式序とりいて。格と式とに兼られども。式を主とせる事ゝ論ひ。格乃事と。貞観格序と。延喜格序とに委きれば。此二ツ序を挙て註せらるゝ。此二格の成らる由。おゝ施行し給ふる時ゝ事ゝ。ちゝ格ゝ。類聚三代格乃事。まゝ近頃出来らる格逸の法曹類林を引て辨ず明し。因て此書ゝ事ゝ辨ず。終に三代格ゝ添讀べ。政事要略。朝野群載。類聚符宣抄などの事をも論たきあり。

古史徴一之巻秋

開題記

平篤胤謹撰述

○上件三典ゝ添讀ばゝき書等ゝ論 上六

上件論ずる諸祝詞。おゝ日本紀。古事記。姓氏録三典ゝ事實を熟く明ふせむとゝ。専要と讀ばゝき書ハ。續日本紀より次々。五國史。類聚國史ゝ更ゝ。風土記。舊事紀。令。式。格。律。和名抄。古語拾遺ゝなどを讀明らえ。引き合せ辨ずゝ。解得ゝ事ゝ。其ハ。おゝ五國史とハ。續日本紀。日本後紀。續日本後紀。文德天皇實録。三代實録ゝ。日本紀ゝ。三代實録ゝ。世に六國史とゝ。日本紀の事ハ上に云ふ。續日本紀以下を五國史とハ云ふ。祝学乃輩。古の御紀ども。成る概略を知らむと思ひ。

近頃りできそこる群書一覧を見るに、凡て要とある書等のその成きる時代、まこと其書に躰裁を一通は知るあるは、いと便宜き書なり。然もどやうくこのき書の載し落せるも多く、論ひ漏せる事も多ゝもなど。其心しして見はべし。類聚國史に菅原贈大政大臣、宇多天皇の寛平五年ゐ。詔命蒙を坐して。日本紀より文德天皇實録までの御紀に事實を。部伐分ち類を聚め。なほ其後の事實をも多く書加へて。二百卷と為給ふきた。六國史ゐ合せ讀て國史に誤字を正しなど便りき事どもも多こそ。然もども中世より次くゐ多く失せて。今え半ばかりも有べし。近頃仙石政和ぬしの異本どもを校正して。板ゐ彫しえらもこそ。世に傳へる本乃有に悉く集られもこそふと見えて。いとも辱くりやもこそ珍き挙ゐりきり。是に就て師に玉勝間に。古書どもに事を記さもこそ儀ゐ古へのえをこそ書等乃。寫本ゐて有ゞ多きは。いとでく悉板ゐ彫て。世ゐ弘くせまほしわびなり。今の世大名こそちゐどにも。隨分ゐ古書をえらび給ふあもぞ。嘸其家に庫ゐ納えて。集みのはしに

ゐて。見る人もあく弘まらざきた。世乃為ゐそ何の益ゐく。有かひもゐし。若實ゐ古書を元で給ふ志なくた。かる珍こそ御世のこそるしゐ。大名こそちゐどは。其道の人ゐ仰せて。他本どもをも讀合せ。善を撰せて。板ゐ彫らせて。世ゐ弘え給はむは。こそ後ばよりも珍こそく。未に代までのいとき功ゐる法し。勢ひ富る人乃上ゐて八。斯をうりに費ハ何たこうりの事ゐも乃らで。其功を天の下に人乃いとき惠を蒙まて。末乃世まで遺る挙ぞこそし。返をく志あらむ人もゐ。と長歎せまつるは實然ゐやにて。其ゞ中ゐ適くまは。藏板ゐどりいて物せらはし。も漢籍をぞ物せらふめる。なはき然る大名こそちに仙石ゐ。こに物せらきし。これ鏑矢ゐ驚かして。かふ御挙の有まるとゐ。矢たけゐ思ふ我徒乃。得物矢えりこゐ。やちこの長歎を阿波礼と聞し給ひてゐも。風土記は古の真に事ゐ多く失せて。出雲常陸肥前豊後に風土記のみ残きり。此中ゐ。出雲風土記のみ全く書あらば。常陸乃ハ十一郡に内八郡残きり。此ハ信友ゞ京ゐ傳えりられど。肥前豊後も全て。松下見林の秘藏こそし本の寫しを得て。彼此ゐ傳へるとて世ゐ弘あれるこそ。まこと近き頃中山信名てふ人。常陸國ゐて丁本を得こそるゐ。是も八郡の記なりこそはべし。予乃のらいて。

信友が本を貸うるを校合して。塙撿校の群書類從を取きて。板を彫らう。近頃世に現はれたうる古書の中に。是をうり珍らしきは。其餘も悉失うるゐや。世に顕れず。或人の物語よ。丹波風土記と。尾張風土記とを。藏給ふきと。世に弘まらむ事を惜みて。人に見せらきぼと。語ふき。下ぼまに。然る倫も多うの所を。大名となりむ人の。然ふ俗に。事に有まずく所思ふるを實然るゐや。仙覺律師が万葉集抄や。釈日本紀とに引用うはを始め。其餘の古書等にも彼此に引うるを據ひ聚めて見るうり外ぼ。其古書どもに引うる井似閑が抄集めて。万葉緯とふ書の中に取りうるを。信友が其を本書に比校て。淺うふを補ひ。また異本どもにも校合せ。また似閑が抄集書等に引うる遺文をも抄出て書加て。彼四國の風土記どもを。異本に校うるに添て一部とふを。已はと彼此の古書に引うるを見るがまに。はに書加て。古風土記逸文と称うる。時得うむに。校に彫て。傳て。抑國の風土記事を記ふ事の見えうる始め。第三

條にも引て。履中天皇紀に。四年秋八月。始之於諸國置國史。記言事達四方志とあり。志は旧くもかく訓て。谷川氏説に。志は與誌同記也と云へるは然る説なり。此は風土記と言ぶきども。諸國の言と事と。記と有もて。其記せる誌は風土記の躰なりうむこと知ぬ。また上にも引る推古天皇紀二十八年の下に。録天皇記及國記とあるは。決く風土記の類なるべく所思うる。斯て此後の事は。信友が委く考て記せる稿なり。其説に。今世に遺きる諸國の風土記に。いと古く珍重きゆ。また後なるとぶ有。今已が見うる限を以て。其大概を論ひ定め試むとき。然るは大抵の人は。風土記とい不を。延長の年頃に成きる物とのみ思ふ由なれど。然有ば。其うり古く次くに出来ぬ物なり。其はまだ

古風土記を召たまひし趣を案るに。元明天皇紀に。和銅六年五月甲子。制。畿内七道。諸國郡郷名著好字。其郡内所生。銀銅彩色草木禽獣魚虫等物。具録色目。及土地沃塉。山川原野名號所由。又古老相傳旧聞異事。載于史籍言上。とある旨を奉りて進れる史籍をすなはち風土記なるべく所思えり。其ハ仙覺が万葉集抄に。大和國宇智郡の事を説て。和銅六年令註進風土記之時任太政官下之旨定二字用好字也と云へるを思ひ合せて辨ふべし。古き年代記乃和銅五年の條に。作風土記とある。ハ此時の事歟。一年あがりて傳ふる説を取れる物ならむか。また古事記も和銅五年に上りまつるを。四年に關するを思すぞ。共に二年まへに上れるものにて。年代記にかゝる詔命なりし年號挙ぐるに。此和銅の度に註進まつる風土記乃今世に遺れるもあるべし。

は。常陸風土記ば其が中に一篇なるべき。文を畧ける処ありて全くはあらじ。さて今傳はれる本に題名なきは脱たるか。また原より無かりしにや。其は和銅乃制にも載于史籍言上と有て。風土記てふ名目の無きばあり。然らば後に風土記と號られたるか。其ハとまれ。万葉集抄釈紀等に此記の文を引て。常陸風土記とあれば。既く然號る事疑なければ。今も然いふ。其は此風土記の發端に常陸國司解申古老相傳旧聞事。問國郡旧事。古老答曰云々（記中に。古老曰云々と記せる処々まゝあり。）と書出せるは。全く和銅乃詔命乃文を奉する文なれは。いと著く。また郡に隷て里と書けるも慥なる證とぞ思ひなる。（出雲風土記に。郷字者。依靈亀元年式。改里為郷と見え。後。また出雲備中風土記にも。靈亀年中云々とあるに依りていふ。）風土記は。天平五年二月卅日勘造とあれば。かの和銅六年ゟ至二十年ばかり後に進まつる物なり。此は和銅乃詔命によ

まて進まりし後。故なりて再勘ずて進まる記もあらばし。まと釈記を引きる土佐國風土記は。高野天皇寶字八年云くと記せる文あり。此は出雲風土記を勘進せる天平五年なり。三十年後乃ちなり。まと万葉集抄ゐ引きる筑前風土記ゐ。當奈羅朝天平四年歳次壬申とあるも。彼天平五年ゐて前年ゆて間近き分上ゐ。當奈羅朝とあるを。今の京とありて乃文なり。此等同時ゐ出来る記なるむゝ。是も万葉集抄に引る備中國風土記ゐ。奈良朝廷以天平六年甲戌とあるを。まと其後ゐ出来る記なるを決し。はと肥前豊後れを。大概出雲のと同ど躰裁なれを。同ど頃ゐ進まる物なるばし。文体は出雲乃ちも後まて見ゆまを。延長三年ゐ召上ゐ乃ゐる記なるむゝを思はるれど。延長三年の官符乃事は下ゐらばし。延喜十四年四月。三善清行朝臣の異見封事ゐ。本朝文粋ゐ載る。臣去寛平五年任備中介彼國下道郡有通磨郷。爰見彼國風土記云くとて

引ある備中風土記は体を按ずるに。此文二十二社註式古本ゐ引る。ふほ此國乃風土記として。万葉集抄二十二社註式の異本諸社根元記等ゐ引る文のあるも。同ど躰裁ゐ見えり。肥前豊後は。稍後ばまゐ見ゆるまと。寛平は頃既ゐ在し書ゐまを。肥前豊後あるは元ちゐて。共ゐ延長は在ちり在来し風土記ゐばし。寛平五年ちり。延長三年まで三十餘年あり。けてその外古書等ゐ引る。諸國は風土記乃文の躰裁を考ゐ。常陸出雲は同ど趣ゐ見ゆるゐ。肥前豊後乃ゐ等ゐほど見ゆるも有。まと彼備中は如き書ざまるも有と思はまて。區くなるゞ如く見ゆ。其文少ばるを。貫して論ずるゐはなるば。其大凡を推考ずて言ふなり。まと釈紀ゐ。筑紫風土記曰とて。肥後乃關宗は事。

筑前社芋湄野の事社文を引らば。今一説御津柏の事社文を引らば。此ハ何きの國ぞ。いまだ考ずば。はゝ筑前宗像社記ふ。西海道風土記曰として。身形郡社名の所由を記せる文ありて古文と見ゆ。此等も上ゆ論ずふ風土記なるを。五畿七道ふ帙を分らば方の名を取きるはるばゝ。總て風土記ハ。各國ふて記せる書ふて。撰者も各別ふれを必しも文法は等かるまじ社理ふり。然きを何れを何時社と慥ろふ知ばゝ。上ゆ論へる風土記どもハ。決く延長ゝり已前ふ成ゝる物なる事は。違ふはゞくぞ所思ゆる。ばて延長に風土記召きし事を。朝野群載ふ載せば。延長三年十二月十四日社大政宣符ふ。五畿七道諸國司應早速勘進風土記事。右如聞諸國可有風土記文。今被左大臣宣偈宣仰國宰令勘進之若無底探求郡内尋問古老早速言上者諸國兼知依宣不得遲廻符到奉行ゝ。此符社旨は諸國ゆ前ふ進きをし風土記乃案有ばゝを。今度そを覆勘て進るばゝ。そを無底を郡内を探求ゑ。古老ふ尋問て更ふ撰記して上るばゝと。ゆ。上ゆ引らゝ。和銅六年の詔命ふ。古老相傳旧聞異事載ゝ。干史籍言上とゝなると。此宣符ゆ尋問古老云ゝとある。ゆ同旨ふて。國ゝの古傳を專ら記さしめ給ふる事知ばゝ。此宣符ふ應て。前ふ進きをし風土記社案を。更ふ勘進きる國ゝ乃多かはべく。まゝ新ふ古老の旧聞を探求めて上きるも有ばけきど。古書どもふ引てふ。ばこの遺れるハ。其差別知ばゝらば。本朝書籍目録ゆ。風土記ハ諸國土地本縁と載らゝ。

此等乃類れ風土記あるべし。故古れ風土記れ趣を取て總て考ふるに。各國ふて。旧き事開傳へる古老乃説を專と記さ〻え給ふる物ふて。古事我證に便となるさらや少うらべ。いと〻も珍重さ〻貴れ籍ふ。中ふ〻いとのにぞや思はる〻事れをりを無み〻も非ず。然ども其ハ既くさらう誤て傳ふさる事も有ゲふ見ゆ。を熟く。はさ當時のにかく所説も。稀く有ゲふ見ゆ。を熟く見て撰び取ばを。抑風土記は。古老れ旧聞を專と記ち〻え給ふる物ふる由を。上ふ引る和銅六年五月の詔命に。古老相傳旧聞異事載て史籍言上と見え其を奉て記し進る常陸風土記乃發端ふ。常陸國司解申。古老相傳旧聞事。問國郡旧事古老答曰云く。上ふ引さる。和銅六年乃詔命乃文を。〻書出さるを始え。記中ふ古老曰云〻と書ふ処あるとの。但此記ハ。國司れ撰ふる趣ふ作さる。ふ〻出雲風土記の發端ふ。老細思枝葉裁定詞源。亦山野濱浦之處。鳥獸之棲。魚貝海菜之類。良繁多悉不陳然不獲止粗挙梗槩以成記趣とあるハ。此記を上ふ詔命を。當國れ國司乃奉て其下宰ふ掌らせ。古老等ふ命せて記させ。ふ書ふるゲ故ふ。其老人等〻言もて。老と自称ふるゲ。上ふ挙さる。延長三年ふ風土記我召さ〻ふ官符ふ。探郡内尋問古老。早速言上とあるも。和銅れ旧章ふ准拠ふ事て。と見るをも思ひ合ばし。古ハ國〻ふ國老。郡老。府老。庄老。古老。老。ふと称ふ長のあ〻と見えさ

て。そゝ京の東寺に秘藏する古文書どもを見し中に。兼平二年丹波國多紀郡司解狀乃連署に。國老多紀臣。國老日量公と記し。同年近江國蒲生郡安吉郷字土田庄田地券抄色目之事となる文書に。以前乃立券文乃署名を載する中に。郡老從七位上佐く木山公房雄と見え。應德五年伊勢國大國庄ゝ文書ゝ連署に庄老と云もあり。此等乃稱ゆゑに。連署に一老とあり。年乃田券に國名を破きて見えざれど。其連署に一老とあり。弘安元年の文書に。若狹國太良庄百姓藤井宗氏。古老百姓眞利眞安などと記せるも有き。また筑前國宇佐八幡宮に藏する元亨二年ゝ文書ゝ写を見しに。連署に府老監代紀朝臣とあるを。古は太宰府の府老なるべし。此等にも思ひ合せて。老とは記乃作者等が自稱なりと知られ。今世にも將軍家の御政事に行ひ給ふを。ゝゝ御事ハ更なり。大名衆乃政事と職務。家老とりの老と云がなを。また市にも駅にも年寄宿老などと稱ふがあり。また國にも郡にも村にも。年寄と稱ふがあるハ。上古より老人は能く物事に識を行ふものなるに。長や倚頼とするから。自然に老と云ふ稱乃出來たりと覺らるゝ。この職ゝ稱の如くなるなり。ふるきて古。世ゝ人乃心深く厚くして。若人は賢し立ばして。何事も老人を貴び。物問の習ひとなりし風俗なるもと。書

○古史徵一之巻

等に見えたる故實に考へ合せて。熟く辨へ曉ふべし。然る後に。老を以て若を いへば賢ふるゝ長ぶる事。執る事もあり。俗とはなりにたれど。然はとゝ。今も其ふるゝ覺て。いと尊き御國ぶりなれば。漢國ぶりかも。いと上古ゝは老を尊む意を。ゝ乃無ふしもなりしかど。素より賢しぶる國がらなりしを。代くみ官を建替ふ事くしき名を付て。賢くしく持成せるまゝに。世は乱れたる。皇國ふして。も彼國の唐乃世ゝ官ゝ擬び建め給ひしかど。實ハそれら其。建ふるかゝるやうに。非ずして。終に今れ御世の樣に成來しは。弥益に古ふ復る御國風の所思てゝ尊し。さも因ふいにしへ。論ふなり。偖ゝの老細思枝葉云くゝ古文を篤偏も同じ趣ふ考へて。終に文ふ。天平五年二月卅日勘造秋鹿郡人神宅臣金太理とふ人乃老となるを思ふに。此記を當昔ゝの金太理とふ人乃老として作るべし。其はまた其記せる事實ども。當時新に記せる旧聞も有ばなるべき。大概は旧ゝ當國ふ記し傳へる書めり

て。此時其をいちゝ修ひ勘ふて造まるふて。細思枝葉裁定詞源云くとは。源そり社傳詞の枝葉となる。繁多な文をゞ裁定えて。産物ふども悉くは陳ぶ。挙ぶハ獲有べこゝ思物ふ社み梗槩ふ挙て。公そり命せ給へふ趣ふ記し成せは由なるぶゝ。其を意宇郡なる國引の古事を記せる文社類は決めて天平社頃乃文ふ非ど。か社履中天皇の御世ふ。國史を置て記ちせ給ふる時ふどそりも。なほ旧く書き傳へ乃む。とさふ所思ゆる傳なれゞ古文章を採て載うる形るぶく。此ふ反まて安来郷社下形る。語臣猪麻呂ゞ古事は。始み浄御原天皇御世甲戌七月とりひ。終み自爾時至于今日経六十歳しなきを旧く聞傳うる事を。天平五年ふ肇めて記せる物なるぶきを思ひ合せて暁るぶゝ。文の状も。國引乃古事の文とは。いちて普さく異ふして新しく見えそり。一ちて普通社本ふ。右の文の上み字を下て。得而難可誤とりふ五字一行あり。一本ふは小字ふ書たり。此を後人の此乃文社意を得がてに。得而難可讀と傍書しうるゞ。まて後人社讀を誤みなやまりて。固右の文と思ひ混ふて。一行み記せる物なり。と云ふ説ふ誠ふ然ふ説等形て。上件論ふる説ども。委曲ふ讀辨採て。其闕うるを補ふぶき物ありそり。備又惣國風土記と云ゞ右て。悉く欠残て。ふ篇なるゞ。中ふ多く駿河國社のみ大こゝ全うれど。其も虫喰ふどして欠うふ処乃て。惣國風土記乃中ふ。此國

乃ちりは全き故ふや。晩み塙保巳一
社群書類従より取て修まて抜より。けて此記とも。既く世
ふ廃くみありて。少ばく遺るも虫喰ひとふ損ひまて全の
らぬなし。古くは文和乃年間に。中原師行の奥書せられたる
本を始め。其後嘉慶文亀弘治天正あどの年間。別人社奥書し
まるも有て。然るに昔社奥書えふくて。寛文万治の頃
ふ写しうる本も有て。そは巻くを見て曲より知べ
し。けて此奥書どもも。疑ひつげある事社なれふしも非紛
ど。本ども互ふ写誤ありて。正しく思ひなさふ所も少かり
ば。また奥書せる人の傳乃知らきざして。考がときもあり。或
人云此記乃奥書どもは。後人のけのしら心ふ。珍とぞみ見せ
むしとく書べうる物なくむろ。誤字脱字などれ
と云て。さる事もなるべくや。さて其本とも。
多有こゆは云も更ふり。甚く文社錯乱うる処社有て。中ふえ
國も郡も交錯ひて見ゆるもあり。又同ト國郡乃残篇ど二通

あるは。同記乃別本の如く見ゆきど。其え原本社甚く錯乱と
ふを取集めて。ちう綴ていうと見ゆふ形ど。さぞて此を疑え
しれまでふぞ錯乱あひうる。其は原書巻物なりしが乱うる
故なり。さぞて古書ハ巻物なるが多き歟。其継うる所乃離き
或ハ虫喰うり裂あどして乱きうる。修補ふして次第を錯
乱て。或ち巻をさ冊ふ錯冊て継うふが乃なり。まと離うるまく
なるを。書写を時ふ。次第を錯乱ふ事もある歟。此れれ
文書どもを数多見て心付うるなり。此心みきてえ
て古書どもを見るふ。考への助とある事少かり。此記も原
ハ巻物ふて殊ふ乱うりなきを。其を写を時ふ。然るに錯
乱社出来うる物ふるぞし。記中ふ紙数若干枚計。長若干尺計

虫喰あしく書うる所社有をとても思ひ合せ侍しっ。此ふ依て思へば若
干丁虫喰しなるも。巻物乃紙数を云、るなふ侍し。ちて然寫しく後の本ども共も。虫喰
脱誤などなく有るかゝ。互ふ異なる本ども社世にある為りぬ。ち
て此、惣國風土記は。い紀の頃出来うる為る知侍のゝ以。上ふ
論へふ古、風土記とは。遥ふ後世て見も。強て考ふふ。後三條院、
天皇社御代ふ召きうる物ふゝむと思はるゝ事あり。治暦四年ふ践
祚なりて。翌年延久と改元あり。其えふ紀百練抄に。延久元年二月廿三日可、
停止寛德以後新立、庄園縱雖彼、年以往立券不分明於國務有
妨者、同停止、之由宣下。閏二月十一日始置記録所庄園券契所、
定寄人等於官朝所行之。と見え。愚管抄ふも。此、天皇社御事を称し

て言らく。延久社記録所として。始て置きうりるハ。諸國七道
社所領乃宣旨宣符をなして。公田をかをむふ事。一天四海の
巨害ありと。聞食しなりて有るゞ。此ハ東宮と坐しあどの事を申せり。聞食なりて
と云へるを深く思ふべし。をれたち宇治殿の時。一乃所社御領くとのみい
ひて。庄園諸國よりちて。國くのけとえ堪がこしふど云を聞
し食し持うりふふ。ちて宣旨を下されて。諸人の領知
社。庄園乃文書を召きりふふ云くと云ひ。此ふ文書と有れ風土記なるべく所思
ふ。續古事談ふ。帝四月即位あ上しふ。秋社納ふも及ぬふ。世
の中ふほ上ふり。始めて記録所を置て。國く社衰伐直されぬ
きうり。延喜天暦以来ふは誠ふかしらき御事なり。此、時うり執

柄の権抑(オサ)ゑらまして。君ゑ於このら政を知ゑ給ふ事に歸る云く。
又云帝東宮の時。天下ゑ政を をゝく聞置(キヽオキ)るゑひ。御即位ゑ後
ちまぐゝの善政を行ひ給ふ。其中ゑ諸國重任の功ゝのふ事。永(ナガ)
く停止せゝまゝに云くゑゝど見えゝり。此天皇の御時ゝり前。
中國ゑ下ちまゝる官符ゑ。案去(ル)寛德二年下五畿七道諸國符
云く。停止前司任中以後新立庄園云くゑゝど云ゝゝ。符宣抄ふ
見えて猶あり。なほ此天皇ゑ大御心(オホミコヽロ)の趣右ふ引ゝゝ書どもふ何(ナニ)く
まと記(シル)し。まゝ古事談。續世繼ふとゑも見(ミル)まるを。竊(ヒソカ)ふ考(カヽ)合
せて察(オモ)ひ上(タテマツ)るふ。深(フカ)き大御心(オホミコヽロ)在(マシマ)して。早速(ハヤカ)ゑ諸國(クニ〳〵)ゑ詔(ミコトノリ)ひりて。
風土記を召(メサ)まるゝりゝむゞ。いまゝど作例も整(ヽノ)はゞと。ゑ於草案(ミタガキ)の
如くゑるを。そゝこゝゝゝり記録所へ上(タテマツ)る。いまゝど各國(クニ〳〵)悉くゝゝ

上(ハテ)終(ヒ)ほどに。在位ゑ於このふ四ゝゝ余(アマリ)ゑゝて。御年(ミトシ)三十九
ゑて御受禪あり。後三條院天皇御惱(ナヤミ)の事もれたゝぬふ。三十
九の御年ふて。八歳の皇子ふ御位を讓(ユヅ)ゑ給へる事。秘(ヒメ)ゝ故
ありゝる御事ふるばし。藤原の氏人(マヒト)
ゝち社甚(イタ)く威勢(ホヒ)ありし頃なりゝる。翌(ヨク)社ゝ社五月崩(カムアガ)ゑ給
ひて。御政(ミマツリゴト)社ゝまも。ゝ於(オ)ゞ甚(イタ)く變(カハ)ゑゝりゝまゝ。彼記の挙も
廢(スタ)まゝるゝ事ふ。官庫ふ埋(ウヅミ)まゝるゝ於るばし。まゝ上ふ論ひゝ
狀ふて。早速ゑ召(メサ)まゝゝりしゝば。其勘(カンガ)撰(エラ)ばるる狀(カタチ)も混(マジ)らハ
く正(ヽ)しゝゝ。事も步交(ウチマジ)るばく。作例(ヒトヽ)も整(ヽノ)ふまし。まゝ
和於の社年間(トシ)の事なまむ。各國(クニ〳〵)悉(コヽロ)くそえ上(タテマツ)るふせざりけ
むゝ事も思ひ計るべきふり。まゝ後社事ふゞ。弘安八年九月
晦日とある豐後國圖田帳ふ。豐後國莊公并領主等之事可委
細注進言上(スル)由。今年二月廿日雖被成御書(ヲ)候云く延引候云く。
雖然若急速御用候者可遣期候之間直入寺粗令注進一卷內
內為御存知令進上候。但此狀者無四度計候。追進之時可被督

取候證言上と言へるをも思ひ合せ給きなり。扨此天皇社御代のさま委く論えまほしき事多けれど事長きれを洩して。熟〻其御世社書どもを見てをく案ひ奉るに。伊勢風土記抄ハ。此も惣國風土記乃中の記にては古書なり。此抄の事を下ふ云ふ。校合せ給ふ風土記社異本ハ。白河院御本と云ふなり。白河院天皇は。後三條院天皇社第一皇子ふて。太御父の御位を受繼給ふ事。其は父天皇社記録所ふ在て文書どもを受藏給ふ中ふ在りしをもて。其を申出て寫し給ふ本書を。然称して寫さふ本乃。當昔世ふ在りしふる法。此風土記抄社跋ふ。乗名郡此下雖有二三箇所。諸本皆或虫損鼠破難證之。漸右件分校合百家本註之上焉。宦本亦如此。とあり。白河院御本と云をも校合せ。よると宦本をも校合せるふ。件ハ〻へハ浅思ひ社。宦庫社原書をりして。既く損紛て全こ〻ばり〻形ふ。さて惣國風土記乃。加賀國社記乃奥書ふ。右之風土記者加賀國之小帳也。尤為官人為其用。以宦本令校合畢。嘉慶二年二月下旬。左中將元隆とあり。按ふ各國乃公文社中ふ。大帳と云ハ見え給まど。小帳と云ハ未知ら〻。一本ふ小帳を水帳と書る本なるふ依て考るに。今の世ふ水帳とてあるえ。古乃圖帳社名残ふて。御圖帳と云へるを。其の書ふ〻へふなる〻むと思はるまど。をく思ひ非ど。然まど當昔さふ帳も在ぞをけむ。然ふをの〻。餘ふ聞及ぶとて。一向ふ疑はむハ中くふ偏形り。をやく荒井君美ふ〻社。加賀人室直清がり答給ふ書ふ。此小帳の事を論ひて。民部省大藏省などの中ふ在り小帳と云ふも社なふを。後人の風土記と心得給ふる物ふるべしと記れ給りき。まと此奥書ふ。為宦人為其用と記せふ嘉慶の頃ハ武家ざまふて。足利義滿將軍の。北朝の政申し給ふ時ふまを。公家ざまふて。貢賦乃事などを聞食ざり社らりど。然を

が為朝廷の御稜威を下し奉らんとの心ざしみ。ありて書ざませる物なるべし。其頃社文書の例ある事なり。さて此記。あべて巻端に。日本惣國風土記第若干。某國某郡と記して。一郡ごとに巻を分つるも。また一國を一巻とせるもあり。また風土記とのみ書て。某國云々と書出したるもの。其は伊賀伊勢尾張の社々なり。其中に伊勢のは。異本に日本惣國風土記と書たるも有て。大かた同じ書体なれど。伊賀尾張のも准ずて共に惣國風土記なるべく所思ゆ。さまで。その伊勢風土記抄にも。日本惣國風土記と無きを。昔より然る本もなりしなり。はたまた郷庄等の下に。公穀假粟。神社社下に圭田。寺院の下に寄田などゝ書て。其税まと地坪の量を記せるは。其を記さゞる國もなり。其外一貫して記

ばまた同じ例なるべきハ。のまごとうるはしく卒業せる草案を。まゐ宦に充し上て。紀さむと為まるに間に。故ありて止みしなるべし。此時代の考ハ。上に以ずまを。はたゝ賦税の名目。田地の量称にいまゞ聞も及ぶ事なりて。疑ふしたゞ如くあまど。然る名称ども。世々に異なる事の有て。今容易く知ごと社事の少うるべき。古文書どもに。彼此見えうるに思ひ合せ。中に考へる證もあまど。いと事長くまを。浅し。さばて古唐様を似び給ずは。嚴重しく令式を新に作らま。其書ども出来ぬまど。其時分にまなら社。世を経るに隨ひ。實さのみは行なまず。又はの社とあく沿革もして。その令式も無用なるが如く。元社遠ぬ御世の有

しさまを立かゝるまでなる事もあるを。令式書はしるゝあぐらみに讀とゝはずて。一向に定する人く。令式書乃文句を守まて。其ふ符ざる事とゝはずて。悉く偽書ありと言ふも有れど。此を古、はず事實を顧ざる固陋學とやいはゝ。然ハ言ず此風土記乃躰裁古へのとき甚く別ふして。文も拙く劣まて後ふるゞ上よ。このあぞや思はるゝ事もさのゝ所と聞ゆふ節もえと無ゝも非ど。然きとも然もゞふ昔はず物ふれを。そく採まむふ珍重ふる籍ふりまて。記中ふ墳墓を陵と記ゝふ処なり。令式ふては。止ごとふきあるとまの御あらでは。陵字ハ書ぬ事なれを殊ほいふあぞや思なるれどふゞ堆き陵乃ごとき墓ふりまきハ。令式ふも心ゝ初めで書ふりきむ。まゝと國郡郷乃名は。必ず二字ふ書べき御拵ふるを。三字にも一字ふも書ふるゞ有るを。かゝる事も公

文ふゝ思きは。然のみはえあらぢまゝ事ふて。然る書さまはは古文書ふまと見えうる。假寧令集解ふも古記云として。葛上葛下内等郡云くとなり。此ハ大和の郡名まて。葛上葛下ハ三字を二字ふ書く御令ふ依ふるふ宇知を内と一字ふ書ふるをも思ふべし。まと郷名乃和名抄ふ載ふるふゞ異ふるが いと多く。疑ハしきが如くふれと。此等ハ後の世ふ漸くふ沿草まふ行く。古く置さまへふと変きるゞ少ふらぬ中ふハ同じ世ふして。一區を郷とも村とも二さまふ称へふを。やゞて公乃文書ふ用ひ給ふる事もあり。此ハ古文書どもを多く見集めて。心とゞめで考ふる時は。おの〳〵ふらず御く世くれさまの然察らるゝなり。又庄名ふ出して公穀假粟の員を記しはふさ貢物を記せるもあり。庄ふ公穀を出し貢物せむ事は。必ず有まはれ事なりと疑ふ人も有らむふ。此等もかの古、はず令式書ふのみ泥みゝ。世くはれ實乃在狀を考へざるとふ。そゝ疑ふぼさふまて。東寺ふ藏ふる古文書はず中まふ。延長三年八月廿五日伊勢大神宮司牒ふ云く。去養和年中ふ以寺領田為成圓田壹處ふ以庄外勅施入東寺五十二箇坪坪田ふ令相博庄内公田ふ云くとあり。まと延喜十五年十月廿二日丹波國牒ふ東寺傳法供家多紀郡大山庄田之状云く。彼庄地之内圖帳ふ注公田七坪三百八歩十九坪四段七十二歩之外依員注寺田已了無有

他、妨云くと書て、守源、朝臣を始め、介掾目乃連署あり。こゝに兼和延喜の頃より、庄内より公田乃証あるまゝと若狭、國太良御庄注進、元亨四年作稲検見目録、合二公田拾漆町貳段半拾歩云くとなるゝ庄内より貢物を奉ること越を記せる文書もあり。此、外論ひ辨ふべき事も少うゝ新しいと以ゆく事長々敷で洩し新大の〻と准ず知ばく。なほ細ふ考ずるべ。慥に証れいくらも出来ばゝ敷きど、然をうの暇ゝけきはさて有るなり。はゝと假字おくのひれ正しかゝぬゝ多くなるも、治暦乃頃の書ならむ。みゝ然あるばれ乃ち。

ちて此、記。上ふ論ずる如き状めて出来ゝふばゝ々きで。年久しく官庫み藏ずゝ。かゝく世み寫し出せはも。秘藏せるゝ。ふばゝて世にも知らきゞして有来ず

し形ず。遇く古く聞えゝるは。伊勢、風土記ゝ桑名郡の文を注ゝる古書ふ。伊勢風土記抄と號ふ一冊乃ず。奥書ハ因ず上乃本文ず多くれ異本を校ず。其異なる由を抄せり。其異本ハ、白河院、御本。保元改正、之官庫本。和氣貞説本。貞覧本。吉内府

本なゝど猶なりて、都て十二本で、うなず。吉内府と八、吉田大納言定房卿なり。尾張、國真福寺なる古寫本乃古事記ゝ奥書ふ。此、卿の所望み依て書寫ずるゝ由見えゝり。後醍醐天皇ず忠ず供奉ず。て。吉野ふ候ひしゝ仁ふ。ちて上に考論へふ如くふきゝで。白河院、御本を除きて。異本乃有べくもなゝで有ゝも其は誤ふるべ々きば。採すゝき理ふれど。の形きも寫し傳ずと

ふ本ふゝりて。何本と云べるゝ。よくそのき。直ず白河院、御本を寫さはみゝ非るばゝれを。何の本を正しゝも定がゝし。又いまゞ草案ふゝむゝは。二度三度書改ゝる事も有ばゝ。何年乃頃。誰しの人ゝ撰きるみゝ知ばゝ。ゝ。ゝ。今の世ふ絶ゝる古書どもを数多引ゝる体ゝ

ゝふく三百年ゝり以前ゝ書ゝ。此、引書どもゝ文。いゝ正しく引ゝとゝ。本文の字ゝ異なる処を記せり。新國史、世ず新國史所見えて。其中ず新國史号續三代ゝとゝ。いまゞ見ゝる事ふ。本朝書籍目録ず。新國史号續三代実録、朝繩撰、或云、清慎公撰、自仁和至延長ゝあきで。已々考ゝる後三條院、天皇乃御世ゝりく。あるゝゝれ事記さきゝる史ふれで。此を二ゝれ證ゝとゝて。延長ゝりなのゝゝ乃記なゝむいゝと既みは思ひしゝりど。風土記の文を國史ふ記さきゝくむこゝ。六國

史ふ准考きを。然有ふくも思それば。故案ふふ。國の事蹟記せる古書ふ。伊賀史伊勢史ふど云ふ有て。その伊賀史は當風土記を引出さきは當昔さる類の一部れ書なりて。新國史と云ふ在しなるべし。抄ふ國史まさ史として引さるも。新國史れ事と見えて。文体も事狀も全同じく見ゆきを。同書あるを畧て然も云へるふり。國の事を記せる書を史と云ハむらしきいふに思ふも有ふ。ふきど。上ふ引る和銅六年二月の詔命ふ載于史籍言上とあれを。史とも言ふらし著し。なほ伊賀史乃事ハ下は云を見るふし。はゝと部要見本れ二十二社註式ふ。同姓費倶の神名帳頭注ふも。山城國風土記云ゝ引さる伊奈利社れ来由の文。全く此風土記を採きを。まさ伊賀名所記といふ書ふ。此書一冊なを。巻尾ふ山城大和伊賀三ヶ國之風土記地圖等之内。并歌林之記録抄物等盡授之為三巻畢。陽月齋永閑判と有て。紹巴の奥書あり。ちく此奥書れ趣ハ。山城大和乃名所記も有ふれをそはいまぐ見ど。當國穴師大明神れ事を。宗祇ガ至寶抄ふ風土記云ゝ引さる文。まさ名張郡れ名の所由を風土記曰ゝ引さるも。全く此伊勢風土記れ文を採きを。はゝと伊賀史ふ。大永元年ふ大江廣房作きり。此史ハ伊賀の上は論へる新國史の中ふるべし。國号乃事ふ付て。風土記者。雖出自其國之言。野史之類乎とて論ひきるも。此風土記を斥せり。上ふ論へる如く。撰乃正しく整はざるゝ。かゝ云へるその事を論ずを。まさ常陸國誌ふ引さる。筑波の名號乃所由を云へる文も。此記と同ト狀の文と見ゆ。はゝと遠江國人語き。ふく。先年當國秦原郡上長尾村ふ。古き神社乃廢絶さる跡なり。と覺しき処ふ。大木れ森なり。其処に八幡の小社ある傍ふ。古き鏡を堀出せるガ。其銘ふ遠江國榛原郡五社之内飯津沢神社圭田二十五束。所祭高皇産灵尊也。欽明御願也。日本風土記出所。如斯と有ト云ずを。まさ此銘文の字と。惣國風土記ある文と合せ見るふ全く同ト。但し風土記ふ。當郡神社六社乃るふ五社とあるを合ハせ。まさ神名帳にれ飯津佐和もあるふ沢と書ふ。風土記ともふ正しうらを。然きど假字用格乃

正しからぬハ此外なも例あれど然のみ難なさて此鏡鑄
らる時代を知らざれど銘文の書ざま然をうり古へのをわざ
とは思へるまじ況それこのみ社乃衰亡行を祝等ゞ悲しみて然も
社もしゝゞ乱世のなりゆきびあどみ遂ゐ社も廃絶らるゞ辛くし
て其鏡乃土中ゐ埋まる遺まる物なるばし。されとかく怪事ハ
えせ人の偽まて物せるらしく近き世なも例あまを能く正さ
ばれば一向ゐハ信ずさし。ゐほ子細ゐ尋ぬばきあり。○元亨
二年十月下民部省とかる圖帳乃残篇九ヶ國をかりれゞ少ばし
ゐ存まて其記ざは惣國風土記ゐ似て見ゆまバ若くは同ゞ
物ゐらむらと思はるゝ事の有て同國郡なる所乃なるゐ引
合せ讀試るゐ同ゞ傳れ筥るもあり。あゝ甚く違へる事もあ
まて素らり異書あり。けて民部省圖帳にも古へゐ後ゐ
と有りなるなるばし。其古へゐるたい紀の頃ゐ出来始らるゐや
考牙ざれど孝徳天皇紀大化二年八月乃下ゐ宜觀國く壇堺
或書或圖持来奉示國縣之名来時将定云く聖武天皇紀天平
十年八月の下ゐ令天下諸國造國郡圖進と見え桓武天皇紀
延暦十五年ゐ下ゐ八月巳卯是日勅諸國地圖事蹟疎畧加以
年序已久□字闕逸宜更令作之ゐと見えらるえ圖帳ゐ原始
ゐるべくゐまゝ東寺なる延喜十五年ゐ古文書ゐ庄地之内圖
帳注公田云くと見えらまを此頃既ゐ在しと見え正しく民

部省ゐ圖帳乃在し事の物ゐ見あらまをるハ王海ゐ安元三
年四月内裡焼亡の條ゐ民部省圖帳倉不焼亡と見え職原抄
民部省ゐ條ゐ又有圖帳國郡勝ゐ載以明白謂之民部省圖帳と
云く百錬抄ゐ嘉禄二年盗人切穿民部省文庫盗取文書諸國
圖帳少く紛失と見え百寮訓要ゐ民部省圖帳とて日本國乃
指圖境なるを定らる文の数百巻此省にハ昔らり傳らりて
日本國の重寶ゐて待まらゐ近頃うせて待るゐや見及び
待らゞ諸國ゐ境相論なるゐ時ハ此圖帳ゐを考へらまし
ゐ明鏡ゐてぞ待まらと見え本朝書籍目録ゐ民部省圖帳と
載らるゐは巻数を記さゞ後なる圖帳と云へるをゐはゆゐ
元亨二年ゐ有るばし此ハ既ゐ今井似閑ゞ此等乃圖帳を集
えて其序に圖帳之内至鳥羽後鳥羽両代之事則非古代之圖
帳明矣と云るゞ如し案ゐ此圖帳を元亨二年ゐ後醍醐
天皇の大御心ゐ所思ゐ事の有て更ゐ召さまらゐ物なるべ
きゐやゐ志の思はるゝ由は上に引る百錬抄ゐ嘉禄二年ゐ盗
人民部省乃文庫を切穿ちて文書圖帳を盗取まると有て此
ハ元亨らり九十年餘ゐ経むこのしなり嘉禄乃以前兼久の頃を
まゐ殊ゐ北條ゞ徒いらく朝廷を戮し奉まて御政ゐ恣ゐ行ひ
て朝廷をりさく衰牙給ひ元亨ゐ頃ゐ圖帳も失らり
ゐむらく彼嘉禄乃盗人の逆業ゐ思ひ合をばし抑文書ゐと

ハ貪りて盗人等が欲しがるばかり物は非ざるを盗取りなど云へば北條が徒に奸曲行なむとて此所業あはばし是等は付て思ひ奉るに古の天皇北條が徒のまどはしくに大御政を惑はしてあるを興し古に復さまほしく思ひ給ふるに當時の書どもに見えたる中に記録所を置きて大御自政聞食し給へる事大平記に載せたるなど古に復さむと為たまひし御行に似せ給ふる後三條院天皇の藤原氏に臣等の権威を押て御政を古に復さむと為たまひし御行に似せ給ふる後三條院天皇の召きたるならむと云はば世の國風土記を後三條院天皇の召きたるならむと云はば世の狀うち合ひて然ぞと案ハるるこの外宮度會氏人の系圖に案の今も其氏人の家に存るを思ふ元亨二年に僧師練が元亨釋書を著ハして献きたるも事異なる同じく御世の在狀なり然る後此朝に奉仕ら きし源親房卿の職原抄に上に引る如く圖帳の事記されたるは旧式を記さきたる物ゆゑて真古に圖帳の全くて在ざるるばし其は同朝臣の顕政に書て与らきし伊勢國洞津に考書に安濃社のかくまに参らせしにも勝示の塚とのみ書のせ帳にて民に知しのさまに参らせしにも勝示の塚とのみ書のせぬ今尋ぬるに其形をうるもなしと書きたるを古に圖帳の遺きるを見て然ぞ思ふるばかりまた古の圖帳に在し所に當時廃れたりし事をも證とべきあり其後の事ぞの上に引たる百寮訓要に圖帳に事を近頃は失て侍るみを甚く見及たばらばと三條良基公の書給ふるに古の圖帳に事を云るまく元亨に世に偏かりざりしむ事惣國風土記と同じ趣なるばし さて此圖帳上に云へる九國の残篇の外に伊勢風土記抄に引たる伊勢に圖帳と洞津考に云れたる事と隠岐國に遺きりとふ圖帳の遺文とは見えたきと いかさまうに此事なきに古の乃ぞるや元亨のあるや知ばかりに此を除てたらまど物に見ばらば此ハ事に因て一わたる論ふ あほ言まほしに事も多く且く證とたばき事に無に の〻 ほ言まほしに事も多く且く證とたばき事に無に

しも非ぬ余に古にくしきを然しも委くに言はば其はとはき上に論ふ趣みても惣國風土記も古書なる事は疑ふく思たはく多。近き頃古學をは人一わたる見過して や有々む。古に今式に符たば。今に聞ゆは事も無れた。なるぬ

偽書ありとて採も見ぬとう。民部省圖帳の殘篇も。其を彼令式書よのみ泥こうは偏見ぞう。斯ぞかりみも偽書作らむとせば。出雲豊後乃古た風土記あどは。既くこを世みも傳えりあきで。其寺ふ似せて作るばくはこと令式みもお合せ。物よ廣く見えこは地名神社などぞ紙書記し。都て正史に見えこうる事實をこそ記さばうきぞ。然有ぬをこそも。中くみ偽書ぞこぬ一ツ乃證こうは為ばたなり。俗ふ國名風土記とて。國名の所由のこを假字みて書きこうる物あり。まこと其を真字よて書きこうるもなのよ。假字なるぞ元書と見えこうる。さて此書むげみ近き世よ書きこうる物あこぞ。ト部家こり出こうるものありこと見ゆる事あり。中ふそ。古書ふ現よ記せる古傳をとりこく書こうるも有きどこばては國名乃由緒を。作者の私乃ぞくなてよ考こうる物ふし。て。古へよ呼えぞ物なり。ちて此風土記は。今井似閑が万葉緯よ。十四帖。取

集めて收こうるを。記して云へこく。今所書記風土記殘編十四帖。並民部省圖帳殘編二帖者。荷辻柳陰之恩惠所摸寫也。傳聞。従林氏之書樓出。近世引用此書。雖未見及。而与古書合符節。則非偽書。必奥。誰家文苑可秘置。兵記卷数亦可珍賞焉。とい ふ。それと共よ今已ゞ彼國此郡と取を集こうはが。二十七國をこの事ぞ記ぞある。新井君美ぬし殘篇よ見られぞる由見えを。ふほも尋弥永えて見ま ほしくぞ思ふ。大こうと異本どもふ校合せこく。異ふる所くを書加ふ。證とふはばを事を。見たこうとふをこくは書入ぞを。其こうを返し能見ても。あほ論ばこ事ぞ多くきど。暇いるを ざにしあきを。姑くちし置ぞとは冥を。此こを今度ふの開題ども此事を記し。世に惣國風土記と称ふこの。關本ふて彼記。此あるは古の物ふこ。然きども熟く其書乃趣を見ふ。古風土記を餘乃古書ふ引こうふを據ひ集め。或ハ民部省ぞ圖帳やうぞ古書物をも採を。あこを其地くを言ひ傳へこうる説。あこを其

地く子親しく見もして。鎌倉ふて御政申さき〳〵時代ちりも前ずと後ゆも。國司郡司守護地頭ふどの。各〳〵次〳〵よ記せる物と見也。其れ各〳〵文脉異にして。この紀て一人の手ふ成きは物とは見えず。此は古風土記も。各〳〵文の異ふると同ど謂ふ丁。然きたむけふ捨ぢ紀物こ非ぞ。をく見別て採べき書ぞり。但し後人ふ加筆をゝと見也ふ幸も少〳〵ば。其ハ古史傳ふもをを引用ふるを。其出ふらむ處ふ辨ふぼし。然るを彼記等ふ。今式格ふどの法み禁ざる事も有れど。いと近き頃の偽作ふゝむとて。採用ざる人も有きど。其は彼頃み令式格ふど紀乃全く行はれふは物と。一偏ふ思ふる非心あり。彼風土記ども。鎌倉前後ふ次〳〵記〳〵る書ふるぼく思ふ由ふ。其頃の書ども。みも往〳〵引用ひ。まゝいと近き頃の偽作とは言ゲゝき由ハ。林道春先生紀文章ふも。武藏風土記ふ依て書きゝと見也る事有丁。既ふ今井似閑ど万葉緯ふ集ゝふ。林氏乃書樓ふ出ありと云へるをや。と記せるを信友ど見て。實宜なりとて。此考へを取出れを。其侭さゝふ記〳〵ふ丁。

けて各國紀事の古書ふ見えゝるを。據ひ集めて記せる書は。鴨祐之めゝ紀大八洲記。まゝ近頃遠江國人内山真龍ど著せふ宮所記。國號考。地名記ふど。見るふ便宜かゝ多ゝ。ゝる書ども。ゝ。さきど此書ども。ふ不足ぬ事ども多。大八嶋記と云を著けむとき。ゝば。弓ふほ弘く委く便宜く書ゝめて。新撰ゝ。暇ふくて未得果さゞ。

○けて舊事紀は。既ふ縣居大人鈴屋大人紀論ひ定を賜ひて。偽書と決まりゝるふ。但し此大人ども。も稍前ふ。此を疑ふるも彼此あり。まゝ伊勢貞丈ゝも。舊事本紀剥偽とゝふ書を著〳〵て。此紀を往古乃偽書ふり。古人其偽を察らぼ〳〵して。多く是を引用ひて證とせり。故ふ近世の學者。松下見林。貝原篤信。新井君美。壺井義和など。も。皆惑ひて此を引き用ゝり。山崎垂加ふど。もぼく巫學家乃徒の。此を以て口實とゝる。云言に足らぞと云て辨ふられゝり。然きど。右の人〳〵乃論は。一偏ふ捨ゝる。説ふ委かゝぼ。此ハ事紀序ふ云へるを。今爰に。讀まぼハ得有まゞ紀書等紀列ふ挙ゝるは。全書を取丁用ふるみ非ぞ。據ひ採ぼき事等を採むと。其は此紀は師紀辨られゝる如く

古事記書紀古語拾遺を專と採て記せる書なる事を論あきらかにきだ其疑はしき事どもは擇び捨て取ばし。手ゞ據ひ採きる事等も微し次く論ふ中なれども全くと云ばうり採用ふばきは師も言きを見る如く天孫本紀といふ篇と國造本紀とあり天孫本紀を決めて物部氏記纂記を採て載せるあらむと所思うをべて纂記ふ物の事に前條に既に云まきまこと此に就て思ふに旧事紀ハ物部氏の人記纂うるあは非ざるう其に天孫本紀ハ煩あり餘の篇くまも左右に物部氏を宜しき狀ふ書る所の多く見えられをあり其に序くに辨ず國造本紀に第三條に引て推古天皇紀に聖德皇太子の蘇我馬子と共に議て録さきあるとなる國造本記に遺て傳はきるを採て載うる物なるばくぞ所思うふ然るに彼太子の時うるまこと神功皇后仁德帝なと後に御諡を以て記せる所も文とふ文脈も字用格も甚く異なるを以て思ひ辨ふばし凡てのこの上宮記大和本記なとの狀ゆそ見えうる其加筆ども記事は徵と傳とに次く辨ふを見るべし○因に旧事本紀を纂成せる時代を考ふに大同三年に出來うふ古語拾遺を其後に採きふ文のあると釈紀に引る弘仁四巳年に多人長の撰ばる弘仁私記に引ふと殘思ふに此間六年をうりが間に作きると知らきうり此て其後に書加ふる事どもり彼此あきを其心しく見辨ふべし前に

は文武天皇紀に大寶二年四月庚戌詔定諸國國造之氏其名具國造記と見えうふ記ふるばく思ふきど諸國に國造乃氏を定え記されうる由ふきを符はず。そは旧事本紀あるは氏を定うる記なのく孫ゆふ

ロ。さてその國造記と云ふ記乃今世に傳うらざるもいとも恨き事あり。國造本紀は國造に

本祖を記せは記なれば。推古天皇紀ゐ國造本記と有ふをく符ゐる故ゑ。彼記と思ひ定ゑるに彩む。さて旧事本紀を徴し傳とふ引用ふる彼紀乃篇名のまゆゑ。天神本紀。地神本紀。天孫本紀。國造本紀ゐど云ゑる。旧事本紀乃天神本紀とふ篇ゑとやうゑ云ゲ類ゑ〜ゑきばぞ。稀ゐ〜ゑうちまかせく旧事紀とゐ符る処も有ハ。紛ふ〜事ゑ。○ちて令ゑ某の官人ゑ某事を掌ゑ。某事ハ云くせとと令せ賜符る御令書式は某の神事は云く仕奉ゑ。某の御政事ハ云くととふ。其御式を記せは御式書。格ゑそゑ令式ゑ記させ賜へふ御法乃外ゐ臨時ゐ勅書をもて。格ゑ賜へる御格書。律ゑその令式格乃御制ゐ違ひ犯せる過失を。律ゑまふ御律書ゐ。弘仁格序ゑ。蓋宗。令以勧誡為本。格則量時立制。式則補闕拾遺。四物相須足以垂範と見也。此大旨を得て云へるゐ。但〜此等の名目は唐書孔刑法志とゐふ篇に。人之為惡入于罪戾一一斷律禁於未然曰令。尊卑貴賤之等級國家之制度也設於此而逆於彼曰格百官有司之所常行者也。設於此而使彼效之謂之式諸司常守之法也。とある。古ゑゐ〜ひて定給へは。名目ゐりとぞ。ちて旧ゐり律令格式とゐふ順ゐ云ひ倣符きど。實はこの順ゐ云ひ倣符きゑ〜ゑ。令式格律と云ふ次第と所思ゐり。抑〜右孔御典どもの出来ゐる事は。弘仁格序ゑ古へ者世質時素法令未彰無為而治不肅而化暨于推古天皇十二年。上宮太子親作憲法十七箇條國家制法自始焉。降至天智天皇元年制令二十二卷。世人所謂近江朝廷之令也云〜と。藤原冬嗣公孔書給符ふ如く。と上古ゆは。神隨なる大道の自然孔ゑ化行はきて。令式律の法は〜人為ゐ彰は〜設ざきど。惟神ゐ具はりて。御世ゑ穏ゐ美く治ゑ来ゐるを。さて彩ゐるや漢招〜給ふ韓神乃御心と。

外國こ化人等幾萬と形く。いと多み次くに参来しを悉捨ゐまはゞ御恵こ坐しこ。諸國化郡里よ散ち住はしめ給ひて其諸蕃人ども弥増よ益弘ざり。此處ゐも彼處ゐも住うをしろば。公民乃心も世風も。い化を形く。其方風化穢ゐ化心所為を。見馴き聞馴れ交凝まこ。神隨ある道よ違ゐは事ども稍くみ出来こ。遂ゐ漢風化教令を設けて。論ゐ給ふばく形も成ふゐ。韓神の漢招し給へふこゐいと正直のまゝ公民の心所為の漢風ふ交凝まこ稍くよ悪風ふ轉変きる事ハ。古史傳ふ次く註し辨ゐ化れを。此ふはいにしゝ大ゐ化を云つのくあり。かくて異國風乃教誡ふ物し給ゐふこ。推古天皇の御世よ。聖德太子化御親。十七條憲法と云つを作を設けて。諭し給へはふ始ふて。次くふ弘く委く為給ゐはなるゞ。熟くふ其沿革を考るゐ。聖德太子の新法を制ゐゐゐは。世化人意の枉きる故ふ。其を直さむと思ふ化實義ふは非ゑ。生坐ふゞゝゐ聰しく。言痛化異國化道くを好く給ふ御性ふまゝこゐを。皇御祖神の神隨なる御制ハゐさて。其道くを弘め給はむ乃御心こゝゝ他ふく。其後の御く世くゐ其を委く弘く為給ゐゐ。唐風を好み給ふは本こゝゝふて。神世こを所謂封建化狀ふゝし殘停廢ていゐる郡縣の制ゐ改て。臣等國造等化勢を大よ為ゝと化御心配よて。物し給ゐる形ゝゝを。かく言ふこしは下よ次挙らふを見るばし。其はゝ化聖德太子化性質ふ異國の道ふ好く給ゐる由ゐ。推古天皇紀ふ厩戸豊聰耳

給ゐはなるゞ。熟くふ其沿革を考るゐ。聖德太子の新法を制ゐゐゐは。世化人意の枉きる故ふ。其を直さむと思ふ化實義ふは非ゑ。生坐ふゞゝゐ聰しく。言痛化異國化道くを好く給ふ御性ふまゝこゐを。皇御祖神の神隨なる御制ハゐさて。其道くを弘め給はむ乃御心こゝゝ他ふく。其後の御く世くゐ其を委く弘く為給ゐゐ。唐風を好み給ふは本こゝゝふて。神世こを所謂封建化狀ふゝし殘停廢ていゐる郡縣の制ゐ改て。臣等國造等化勢を大よ為ゝと化御心配よて。物し給ゐる形ゝゝを。かく言ふこしは下よ次挙らふを見るばし。其はゝ化聖德太子化性質ふ異國の道ふ好く給ゐる由ゐ。推古天皇紀ふ厩戸豊聰耳

皇子生而能言。及壯云て。習内教於高麗僧惠慈。學外典於博士覚哿悉達矣と見え。用明天皇ゑ崩御る年の七月ゑ。蘇我馬子ゑ與して。物部守屋大連を殺し給ふ時は。御歳十五六ぞこのりゑるゑ。佛籍にいはゆゑ。四天王といふ物乃像ゑ造まて。頂髮ゑ置して。大連ゑ勝くるむゑ。四天王寺を起て報せむと誓ひ坐し。推古天皇ゑ御世乃元年ゑ。皇太子ゑ立給ひて萬機の政事を摂録して。天皇の御事を行ひ給ひ。推古天皇紀ゑ。元年四月己卯。立厩戸豐聰耳皇子為皇太子。仍録摂政以萬機悉委焉と見え。用明天皇紀ゑ此皇子ゑ事を記せる所には。居東宮摠摂萬機。行天皇事と見えゑる。ゑ依てゑ。其年やがて彼四天王寺を建給まるゑ。生涯佛法を弘むる拳に勞き給まゑゑ。御紀ゑ次く見えゑるゑ如し。ゑて十年十月の下ゑ。請于天皇以作大楯及靫繪于旗幟と見え。十二月ゑ下ゑ。始行冠位大德小德。大仁小仁。大禮小禮大信小信。大義小義。大智小智并十二階。并以當色絶縫之。頂撮揔如囊而著。緣焉。唯元日著髻華と見えゑるゑ。明年の正月乃一日ゑ始めて。漢風の威儀を餝まを給ふむゑ結構ゑ。皇朝ゑ本ゑ有し儀制具ゑ。此時其を唐風ゑ改め給まゑ。其ゑ靫繪ゑ旗幟と。龍右白兎乃類の繪を畫しえ給へるゑ。この前朱雀後玄武左青まを乃具ゑるゑ。殊ゑかくあれゑ。是も漢風ゑ物し給まゑゑ。其ハかの獸角として獸を繪きる者ハ。漢制ゑるゑ。御世ゑ用ひ給まを詳ゑ。ゑゑぬをも思ふゑし。決く此御世ゑ。聖德太子の肇め給へゑゑ。風ゑ改め給まゑゑ。然らでは。儀制具ゑ右の品ぐを用ゑる事ゑ。神世ゑ乃定なれば。殊ゑかく記さるゑ由ゑゑ。ゑて翌十二年ゑ正月朔

日の下ふ。始賜冠位於諸臣と見えたるは。唐風より冠位階を賜
ふは始め形也。政事要畧本朝事始ふどよ。此年乃正月朔日を
聖德太子の御心ふ始めて。曆日を用ひ給ふる由見えたり。是も
ふ事と云も更なり。はたと同年の四月乃下ふ。皇太子親肇作憲
法十七條云くと見えたる。ふき漢風ふ教誡ふ物し給ふる始
みて。九月ふ下に。改朝禮と有ハ。神代ふりの禮儀を異國風ふ
改変ふるへふと聞えたり。まと神世文字をも。此皇子乃御心
く。前より委く論へ。ふの漢風を學び取ふ給ふとまてハ。彼國よ
ふを思ふべし。辺邦ふひ。御紀ふ十五年七月庚戌。太禮小野臣妹子遣於大唐
以鞍作福利為通事と見たるは。彼國籍を購求め給遣しに
て。其ふ扶桑畧記ふも此事を記しく。太子令妹子持經来と見
え。善隣國寶記より引ふ經籍後傳記ふ。小治田朝遣小野臣因

高於隋購求書籍兼聘隋天子云くとも有もて知べし。御記ふ
唐とあまど。此ハ後より言ふ。ふ書きたるみく。
實は彼國乃隋と云し時なり。是ぞ皇朝ふり漢國へ大御使を遣しふる始に
て。所謂遣唐使の起ふまりる。此等乃事ハ。師の馭戎慨言より曲
由も有て。古史傳より論ふれたるか。ふほ予ガ思ふ
委く註りるを見たかくて十六年より。妹子臣を送まて参来し
戎人乃還ふ時ふまと妹子臣ふ送らしめ。倭漢直福因高向漢
人玄理。南淵漢人請安ふど。八人ふ添遣しふは。猶委く漢風
を學び得しふ給ふむとてふり。かく成もて来しハ。馭戎慨言
十一年七月の下より。彼國ふ學問ふ遣しふる。僧惠齊惠日な
どいふ者ども。還まて来て彼國を称て。法式備定珍國也。常須達
と云へるなどふ案ふ。旧くふり次く参来ふ。戎人等の風ふ
美しふ見ふるひ。まと其等ガ右ふ趣ふ。のふ申セるふ
率られ給ひて。ふ事ふり多ふむ。皇國乃古風を悪ふるハ。異國人
の入り混まるふり起れる事なるぞき事。是をそても悟まを

し。此皇子。推古天皇の元年に皇太子は立給ひて。萬機の政事を摂録し給ひ。二十九年と云る年に農を給ふは。其間は皇神社御道に功績し給ひ御拳とて。天皇記國記などを録さむ為給ふなり外には。一事も見え給はず。恒の御拳あり。唐風の威儀制令を移し。惟神を尊む人心を。佛意に変むとせみ為給ひ乃至。此を西戎招し給ふ神の御心に交凝らえ給ふる故とは云なり。甚異しき聖意にあるそは有りき。十五年二月乃下に戊子詔曰。曩者我皇祖天皇等宰世。敦礼神祇。今當朕世。祭祀神祇。豈有怠乎。群臣竭心。宜拜神祇。以祭拜神祇。とあるは。實に天皇の大御心なり出らる事にて。此に太子と馬子と余るに佛を尊み神を蔑如とする事を御歎き坐して。詔ひ出らる御言ふそ有りむ。此天皇はしも。姫命は坐しなど。然る直正しき御心の坐りは事は。馬子が葛城縣を賜らむ事を請奉せる時に。聽し給へで。當朕世失是縣後君。曰愚癡婦人臨天下以頓亡其縣と詔ふるをも思ひ奉るべし。行天皇事とはあれど。上件乃詔曰は決めて聖德皇子の御心なりて出ざりりむ。其は彼十七條憲法に。篤敬三寶。三寶者佛法僧也。則四生之終飯萬國之極宗也。何世何人非貴此法。不飯三寶。何以直枉。とは見えなれども。總て此中に。神祇の事を一言も論ふ給はず。抑く天神。祖命の御傳ふ坐る御制度は。第一に神祇を敬ひ祭を給ふ事を御諭し坐て。なれ天乃下治め給ふ御政事は本なるみ。其なおよて。異國乃它食の道を。如此やむとなき物に宜ふるは。何ある聖意にの有りむ。真乃道は上なり言はず。第一み篤敬神道。神道者則四生之終飯萬國之極宗也。何世何人非貴是道。不飯神道。何以直枉と宜ふ法きわざなり。然るに後の事よは有きど。鳥羽院天皇乃大御詔さみ。不如闕礼佛之勤。全敬神之忠。と詔ひ。順德院天皇れ記させ給ふる御抄に。先神事後他事と詔ひ。後宇多院天皇の大御哥に。天地神國は社に祝ひくぞ。わが葦原の國はをさまると御詠ませるをのみや。然るをいさゝかも神乃道をば傳給へ講ふなひて。天皇命に更なり。禁中ふしくそ。そもそく佛經を講ふなひて。天皇命に更なり。世人の意をも。其方狀に女くしく為給ふるに。いとも恨し。さて不飯三寶。何以直枉と宜ひ。末に見悪必匡とも宜ふきを。

馬子が天皇を弑せ奉きる惡事をを必直し給ふぢを任よ當まるく坐なぐるく知らぬ氣あるく彼が聲とありて匡し給えざるた表をれく宜げよ蘊を文まて言ふ漢風を好く給牙ふ故ふ然しも惡とは思られざりしく林羅山先生乃神社考よ太子馬子者同志之人也と言きしく實然も有はくやまと此ふ依て案に久しく皇太子と坐まして戎事を弘め給牙る事とは聞えられと終ふ高御座よ即給はふ深き聖意れ有りをる事とけ聞えられと終ふ高御座よ即給

たるぞ覺えらまひ其御子こちも彼うふはしく睦び給牙る馬子が孫れ入鹿よ迫らきて悉く御頸を經まて終さまひ御末は殘らぞるりぬるは皇祖神乃御道ふ違ひ給牙る御罰あやと痛おぞはしく甚畏くぞ所思やる俗よ武烈天皇ふどの御所行をいく惡き御行れざゆく申せども其は御身一己

らぐ當時れみ乃御行ふを小りるを此皇子乃御所行ども千載にわさ至世乃人意を惡ひ皇御祖神れ道を擾亂し給牙る御行なきを甚く大きく御りるふ此事委くも推古天皇れ此皇

巻の傳よ註せれど事の因みりさ一の記せるよふも子れ佛意を示し漢風ふ教誡子作至儀制を文至給牙るらを下はふ其等を踰まく欲さる勿ふきを弥益くに巧み偽至

文る事を覽至此れ既く戎人孔子も君子之道譬則坊與坊民之所不足者也大爲之坊民猶踰之と云へるハ實然る説おりと惟神なる御道の上らり申ばとられは天皇ハ本を

至尊く坐まる由ふ所思食ぢめ狀ふ漢王風ふ威儀をりて付て殊更よ高く御むとし。ちばて西上王どもの殊更よ威儀を

委く論ひ記せる如く本らり系統ふく卑しき者の時運を得て成上きるなる故に然せでは下を服ぶのとなるふ依ふくを天皇命そしも實天神の御子よ坐て本らり尊され比倫ま

しぬく孫れ其風ふ物し給はむ事を中ふく惟神なる道よ違牙是至其はいと古ふは天皇御身うら御馬よ御鞭御弓を執て

して獵し給ひ布さ産を女菜を撮む女ふも物言ひ好きど現人神と畏き奉至遠き境乃服はめ祇なき人をも御親平給牙

ぞらを天壓神と申しく恐怖よどひ御世ハ穩よ美のりし

を思ふべし下よ引る孝德天皇紀乃詔命ふ自始治國皇祖之時天下大同と詔牙るは此事よりそ然る多西戎王ダ物まる

威儀をなるふがちなくの強頸を伏せく已を拜ませむと爲さ

る儀ふていと嗚乎がましくるも有りる孔子も恥く大道之

行、也謀閉而不興云々是謂大同太道既隱設制度云々是謂小康しかるに佛道和て加て。佛道
孔因果報應孔説を畏み給ふ御心も出来しこのば古の雄々し
孔御行風を廢きて。女々しくなる事給ひ。後の御世々々に此弊おかきさらぬ次しよ
國史を見て知るべし。こゝに御政事を蘇我氏乃已ゞ儘ふ為ることり。そ
從例となりて。後々は臣等孔權威のみ。大きく強く成ぬべき
有狀あて。惟神ふ大同ふて天下ふ。彼此といふ者いで来て。
猥雜がはしく同らぶ。人意も和乃賢く変きる故ふ孝德天皇
孔御世に。其弊ふ直し給ふむゆて形も。殊更ふ嚴しく孔制度を
設け給ひ。はと當昔驕傲王高ぶり皇ふ侮ふる。蘇我氏を滅せ
る後ふ。まと然る邪き臣乃出来なむ事ぞ。いふのぞ。否しふ

も所思看して。謂也ふ郡縣乃制ふ用ひ給ふと察ら
れる。聖德太子の建る御法は。位階を定め。儀制を錯給ひて。神世ふ國々孔國造なども本乃まゝふ置
給ひて。神世ふ國々乃まゝ。なほ封建の有狀ふりしを此御代
ふり國々の國造を停廢て。郡縣の制を用ひて。各國ふ國司郡
司ふ置て。治めしめ給ふ事とは変り必。是ふり後ん國造次く
ふ衰ふ減まて。神世ふり旧くやどやどふさ。大概も亡ふりぬ。
あを下よれ
ふを見ん。然きど。其は悉くふ天皇命一柱孔大御心ふり出
ふる事ふは非ず。實は中臣鎌子連乃深く遠く彌心ふ思ひ慮
まて。孝德天皇ん輕皇子と申し。天智天皇ん中大兄皇子と申
す頃ふ。便宜求めて二柱皇子孔御心ふ應ひ。時々ふ勧め
奉まて。事議らきふふ挙ふ形も有きふ。上件乃説どもハ。日本紀ふ記されふる趣を
ふ取總て云へり。其は次次ふ委くりふを見ん。然るはまた鎌足公孔事の見ふるは。

皇極天皇紀三年正月孔下ゐ。以中臣鎌子連拜神祇伯再三固辞不就。稱疾退居三嶋。于時輕皇子患脚不朝。鎌子連曾善輕皇子。故詣彼宮而將侍宿。輕皇子深識鎌子連之意氣。乃使寵妃阿部氏淨掃別殿。別鋪新蓐。敬重特異。鎌足公傳とのふ物よも。使阿を。此妃を鎌子連に賜ふると聞えうり。鎌子連感所遇而語舍人曰。殊奉恩澤過前所望。誰不使王天下耶。謂宛舍人為駅使也舍人便以所語陳於皇子。皇子大悅とある此始ゑて。鎌子連に命の御起ゑて。神祇伯を拜給ふるを辞びて就ず。疾ありと稱て。津國の三嶋に退居らきとる。くて奉らむとて孔事あり。此公の傳ゑ幼年好學。博渉書傳。毎讀大公六韜。殊常不覆誦之云く。崗本天皇御宇令嗣宗業。固辞不受。歸法三嶋之別業云くと見えて。紀と同じ趣に記しなゑ舍人ゑ言きし語ゑ。君子不食言。遂見其行と試きし事も見えと

王。まゝ是法師と云ふ。周易を學ばきとる由も見ゆ。此に依て熟くゑ思ゑを。此公孔行は。太公望が權謀といふ事。易の草と。りふ卦孔意を熟得られうりと所思ゆる行あり。然きを漢才はりと賢くふむ。はしくる。故遠祖とり家ゑ粘とる宗業を。を嗣きとくく。權謀草制の次文ゑ鎌子連爲人忠正有匡濟心。憤を拳をゑ勤ゑる。

蘇我臣入鹿失君臣長幼之序。挾關關社稷之權。歷試接王宗之中。而求可立功名哲王。便附心於中。大兄疏然未獲展其幽抱。偶預中。大兄於法興寺。槻樹之下。打毬之侶。而候皮鞋。隨毬脫落。取置掌中。前跪恭奉。中大兄對跪敬執。自茲相善。俱述所懷。既無所匿。復恐他嫌。頻接而。俱手把黃卷。自學周孔之教於南淵先生所。遂於路上往還之間。並肩潛圖。無不相恊とのゑ。此は中大兄皇子ゑ媚附きと。

る始。よて。公の傳ゑ。輕皇子。器量不足。與謀大事。更欲擇君。歷見皇宗。唯中大兄雄略英徹。可與撓乱。而無由參謁。儻遇干蹤鞠。

之庭云くと紀の趣は見え、編年集成には、中大兄皇子與中臣鎌子連相計伐入鹿可平天下之由常談之とも見えたり。ちなみに南淵先生とは、推古天皇の御世に西我へ學問に遣はる。南淵漢人請安なぞ有りき。さて中大兄皇子に、謀大事者不如右輔といふ議を奉まつて、蘇我倉山田麻呂臣は、婿ふ執まを結び奉まつる。御方ふ屬け。倉山田麻呂は、入鹿が同族なるを、佐伯連子麻呂、稚犬養連網田といふ人くをも擧げ用ひまを。かく權謀まつて、皇極天皇の四年と云ふる年の六月ふ。右の人くと共ふ。天皇命れ大御前みまへて、彼蘇我入鹿の汚き臣を誅ひ。次て其父蝦夷をも誅はまし。權謀の比類ふ功績は。今さら言ばくも非ず。御紀ふ此事を記されたる所に、中かゝる擧の有むとも知らば、大兄皇子は、大御前に居給ふが、件の擧を見て、自れ宮ふ走まを入りて、人に謀まつて、韓人殺鞍作臣、吾が心痛み奔

と云ふる由を記さまを。其本註に、謂因韓政而誅と云ふり。此に依て考るふ、此は鎌子連は韓を渡せふ書を熟く讀悟まつて、恒に彼方風の行を為らまくむ故ふ、古人大兄皇子の其後異く所思して、韓人と云ふあさ称を負られきむ故に、かく謂ふるふや、何とこのや心有げなる御言なり。後ふ此皇子は逆意ある由のちなるめて、誅れ給ふは事も秘けき謂なりげふ忌はきさり。○因ふ蘇我氏の勢あるに、ちなみ狀ふれ、ちなみの言むふ、其本は建内宿禰命の第三の子蘇賀石河宿禰なり出まつるを、遠祖の功德ふ依て、自然に勢ひ有て、聞ゆるふ、宣化天皇元年に稲目宿禰を大臣と為まつり、此大臣は女二人を欽明天皇幸さまして、御子なまを生しめ給ひ、敏達天皇の御世ふ稲目宿禰の子馬子は大臣と為給ひ、用明天皇崇峻天皇推古天皇共に、欽明天皇の御子ふ、稲目宿禰の女等の産奉まるふ。當時の御くに世くに外戚ふ有しなりし故に、權威ふ有まつる。ちなみに想像るばし。馬子の妻は物部守屋大連の妹ふ。其子入鹿は、婦人兄ふ何に恨をか含みけむ。馬子ふ諮言しまつるを聞入まして、皇子等ふ勸め奉りて、大連を滅して、其領所も何も奪ひ收まつる。其は其段に、時人相謂まつて、蘇我大臣之妻是物部守屋大連之妹也、大臣妄用妻計而殺大連兵と云ふる由見え、後に馬子ふ子に蝦夷ふ、其子入鹿は、私ふ紫冠を授て、大臣に位ふ擬

有る所に。大臣之祖母物部弓削大連之妹。故因母財取威於世。と有るをもて知べし。さて其の私に恨に依て。守屋大連を亡し。己が妹乃生奉れる。崇峻天皇を御位に即奉まるが。此天皇の。己が逆事さるを憎み給へる事を安からず思ひて。間もなく弑せ奉れるのみ。其を罰むる人もなく。其御次にも。己が妹乃産奉まる額田部皇女を御位に即奉まり。さまも女皇の始めて推古天皇に坐なり。此挙も女天皇ならむには。己が侭にも譏め給ひし。侮り奉るに易からむ事を思ひて此挙なり。かくて此御世に大政挙し給ふは聖徳太子ハ。馬子が聟に坐しけるを。馬子が権威肩を比ぶる仁は無ましと。少か乃疾に臥せ給を時に。男女并せて千人出家しけると見え。葛城縣を賜らむと奏せる時に。大御言に。大臣之言夜言則夜不明。日言則日不晩。何辞不用。然云々と詔まへるを以ても知べし。馬子死て後も其子蝦夷が大臣にありて。推古天皇は崩御を時に。天日嗣は聖徳太子は御子。山背大兄王と遺詔ありけるは。其詔に背き奉まて。己が女を幸給へる。田村皇子を御位に即奉る。其事に就て同族なる坂合部臣摩理勢を殺しき。田村皇子と申はすなはち舒明天皇に坐なり。此天皇は崩御のこと御紀に十三年十月丁酉天皇崩于百濟宮とのみ有れど。扶桑略記乃或説に息長山田と云が弑せ奉まる由見えたるは。次は御位に

皇后寶皇女の立せ給へるなど。まこと彼馬子が。崇峻天皇を弑せ奉まりて。推古天皇を御位に即奉まるに思ひ合すれば。實に蝦夷が行として。弑せ奉まるのは非じかと思はる。然るは舒明天皇に。此時古人大兄皇子。中大兄皇子など。既に御年長て坐ませるに。皇后を御位に即奉まること。疑なきにしも非ざまではあり。かくて寶皇女と申には皇極天皇に坐ます。御紀に元年正月の下に。大臣児入鹿。自執國政。威勝於父と見え。十二月の下に。是歳蘇我大臣蝦夷。立己祖廟於葛城高宮而。為八佾之儛云々。又盡發挙國之民并百八十部曲。預造雙墓於今来。一曰大陵為大臣墓。一曰小陵。為入鹿臣墓。云々。更悉聚上宮乳部之民。役使營兆所。於是上宮大娘姫王發憤而歎曰。蘇我臣專擅國政。多行無礼。何由任意悉役封民。自玆結恨。遂取俱亡と見えて。翌年の十二月に入鹿遂に上宮太子の王子等を殺して。其領所を奪へるに。此をも罰むる人なく。かくて三年十一月の処に。入鹿臣雙起家於甘檮岡。稱大臣家曰宮門。入鹿家曰谷宮門。稱男女曰王子。云々と有を思ふに。誠に社稷を闚闟ふ逆意を挾める故に。かく皇を弑ひ奉まるならむかし。されど言はゞ。馬子が守屋大連を亡せしは後に。大連乃資人捕鳥部萬を迫るに。萬ちゑくに射して。多く人を殺し。今はよなきる期に。號けらくは。萬為天皇楯。将効其勇。而不推問。翻致逼迫於此窮矣。と

云ふを思ひ合せふみ馬子が時なり既く然る結撰社有し戎守屋大連社覺まそ其を制て遠祖の業のまゝ天皇の御捕とあり守護り奉らむと欲らも々む故ふ萬は其心を得て言る詔なるばし。まこと稲目なりし入鹿ふ至るまで甚く佛を信なるも然る穢き事を巧める故ふ皇朝社正しき神なち祇を稱き奉らば外國の異し社神を拜ろふ多守屋の父の尾輿大連の時なり其心を知りく佛を嚴く惡るるみも有ばし。然もなのらを守屋大連社妹の馬子ふ嫁なはそ私通なり起を事故ふ兄を諸なりけむも知ばろらざさてかく驕を高ぶは逆事せは頑狂入鹿父子多容易く滅さまるる鏃子連の功績をいとともいみしき事ありきを。ふほ古史傳ふ註を見る法し。ちて其年の其月の庚戌社下ふ。天皇思欲傳位於中大兄云く。中大兄退語於中臣鏃子連鏃子連議曰古人大兄殿下之兄也輕皇子殿下之舅也方今古人大兄在而殿下陟天皇位便違人望恭遜之心且立舅以答民望不亦可乎於是中大兄深嘉厥議密以奏聞天皇授璽綬禪位云云。輕皇子不得固辭升壇即祚云くとなのふハ。前ふ輕皇子ふ申せは言多食はゞ社意ふく古人大兄皇子ふ語多託なるなり。其ゝ公社傳ふも此事を記しく。實大臣之本意也識者云君子不食言見于今日矣と有もて知法し。孝德天皇乃天祚ろろし看せふ事を全鏃子連社かるりなる。けて次文ふ。是日奉於號豊財天皇曰皇祖母尊以中大兄爲皇太子豊財天皇と申をハ皇極天皇の御事なり。以阿倍内麻呂臣爲左大臣以蘇我倉山田麻呂臣爲右大臣以大錦冠授中臣鏃子連爲内臣增封云く。鏃子連懷至忠之誠攄宰臣之勢處官司之上故進退廢置計從事立云く。以沙門旻法師高向史玄理爲國博士となのふゝ。左右大臣を置もしは始なり。公卿補任ふ鏃子一名鏃子足天児屋命二十二世孫御食子卿長子殺入鹿賜恩賞授内臣詔曰社稷獲安寔賴公力仍拜大錦冠授内臣封二千戸軍國機

要任公處分と見え公社傳ふ
重き臣幣を拝給ふ忌部首遠祖天児屋命
連遠祖天太玉命なり天祖神世の有状を替ふるに
はに左右乃大臣社おし通く藝命を扶翼奉まつる御前社事と伐執奏し大伴連遠祖天忍日命は御前
に平坐し天降まつる火出見命曹不合命二代御代社状
ハ傳ふるまゝ児屋命太玉命乃子うちの左右に仕奉りきむ
ものく有王○此ふ熟く皇朝ふ
もし言はくも更なり其れ神武天皇社御世ふ児屋命孫
子命太玉命社孫天富命二人祖神武天皇の倭國ふ征入王給ふ
仕奉るもて知ぬしかくて神ぬ乃當昔社状を違ぬ
時ふ忍日命の孫道臣命督將元戎を帥て兄渠ら前孫ひ王給ふ
け奉まは勲しに肩を比ぶる者なく王物部連遠祖櫛玉命饒速佐
日命は勇を殺し天物部を帥て奉まる功部連遠祖殊に次
寵を蒙きるなり大伴氏物部氏乃代と
次ふ外を平治め内を守護王仕奉きるしのば神部氏乃政事
二ふに別きし後も自然ふ中臣忌部二氏乃御事の方に神事を社
大伴物部二氏た天下ふ政ふ給ふ御事の後乃御世ふ仕奉る社
の如く成来ふ故日本紀ふ定まる掌王
人乃大連も成来ふ
此外ふ皇子王任きしの御齋社多ふ氏人王
但し此氏く社ふの
も當時ふ大御代ふ立祭事と
器條理乃論ハふ
外を

治え内を護る擧ふも任ひ給王ふ其れ大臣の加婆泥
乃人くふる故ふ其が中ふ大御心ふ應王るは大臣ふ任給ひ
て大臣と大連と王並置きしる御世も多うり大臣と大連
なり少く聞ゆるは大臣ふ任きしは皇別乃氏くふきば
然有ぬき謂なり然るを此御世ふ其古き例を廢て左右大臣
を置きふ其時ふ神世ふ天児屋命天太玉命と左右ふ仕奉
王後の御世ふ大連と大臣とふ並置れる趣ふ本ぬれ
きるふきど左と云ひ右と云ハ職原鈔ふ記きる如く西
土乃左右丞相の號ふ倣はれしなるむ
四年始置左右大臣止大連と有ふ如く始國治省し神武天皇
社御世なり事始れる古例社大連を止て後ふ始まる大臣
をのみ置給王る故に大連ふ任ぬき大伴物部乃二氏た彌降
ちふ衰王て後ふは聞えぬふも成ふきる皇美麻通く藝命乃
天降坐ぬ時ふ天祖大御神の殊更ふ八百萬神の中なり拔出
て任し副賜王ふ本の御契を思ひ奉まば此氏く社ふの衰王
りて来し伐天なりいふ見行まらむと甚畏しやぬて内臣
とmふ號社とは谷川士清説ふ唐書社德宗ふ段み雖有宰
相大小之事必與贊謀之故當時謂之内相とは義ふ取きる
由り王り此は實ふ然る説みとく いうにも此内相ふ倣れし
るるむ其は本文ふ據宰臣之勢處官司之上云く と有を思ふ

ふ。上ふ左右、太臣と在きど。權勢ハ鎌子、連ふ及ぶ。孝德齊明天智三御代ふ行はきる新法と。大抵古乃公の處分ふ出ふる事ふり。よ於此、旨を心得わきさく次くを辨ふばし。○因ふ云、公卿補任ふ鎌子一名、鎌足と有きど。鎌足と云、々真乃名ふく。鎌子と云はいえゆふ通稱ふり。五世、祖の名ふ賀麻太夫と云るを。欽明天皇紀ふえ。中臣、連鎌子とあり。此を辨ずる人ハ。彼と此と同人ゆ心得うるも有ふ。彼鎌子ハ佛を悪ひ。此、鎌子は佛ふ好きし人なるをや。次、文ふ。乙卯天皇。皇祖母尊。皇太子於大槻樹之下召集群臣盟告天神地祇曰。天覆地載。帝道唯一而末代、澆薄君臣失序。皇天假手於我誅殄暴逆。今共瀝心血。而自今以後。君無二政臣無貳朝若貳此盟。天災地妖鬼誅人伐。皎如日月也。古乃盟告の御文はしも。漢籍ども乃中ゆり。彼此と撫ひ集めて綴ふ成せるふ。意さ不ふ漢ふきど。真の古語ふ讀ばき由ふ。當昔もかば。趣ふ讀上らきもくむ。是ぞ神ふ告と詞を。我風ふ物せる始なる。天神地祇乃ふこのふ聞し者。けらむ。想ふふ文く。彼玄理旻法師や作ふ。とは盟告

此文を熟く讀味て。後ふも蘇我氏の如ち。驕傲れる臣の出来ふむ事を。憚ふ所思者せは事を知ふ。まと封建ち有狀ち罷めて。郡縣乃制度ふ用ひ給て。ふ由をも悟るばし。其は封建ふて公田を作ふ所乃。國々里々ふ處狹く散ぶひて在る故ふ。祀ふき國造え掠め盗ふ。はと馬子ふ守屋大連を亡して。其領所ふ押略ふる如き事も有て。自然ふ臣連國造ふどの勢強くふ。彼尾大ふして掉らきどと云狀ふ成て行ぶき事ち嫌ひ給ひくふぞ有ばち。九月甲申の詔ふ。臣連伴造國造云く。割て國縣山海林野池田以為已財。爭戰不已云く。及進調賦一時。其臣連伴造等先自收斂。然後分進云く。有勢者。分割水陸以為私地云く。我風乃稜きるばち。天皇を畏み奉るばち。本ち謂を忘れうる。いえゆる亂臣賊子の出来ぶきをなり。ちて同日ふ。始めて年號を建て。大化元年とりふ。此は釈紀ふ。誅於入鹿臣之暴逆。天下安寧。政化敷行。號元於大化而已と云。前ゆも。年號ありし趣ふ。彼此乃書ふ見うきども。世ふ公ふ敷行はきるにえ非ど。當時くの

擧なるもと。既ふ人人乃論アるが如し。此年比七月の處ふ。己卯天皇詔阿倍倉梯麻呂大臣蘇我石川萬侶大臣曰可歷問大夫與百伴造等以悅使民之路と有る。新しき御制を物〻給はむ比結構あるし故ふ。まず比御世の民乃たゝふぼゝは。情狀を探ヨ置き給ひて。其情ふ甚く字らぶ。勞き慰め治め給はむ比御心ふく。左右大臣しと。歷く大夫等と。百伴比造等とに問しめ給アるあり。神世ふ神魯岐神魯美命乃御命ともて。大御祖通く藝命ふ。葦原中國を治め給アと詔命せく。天降し賜アる擧ハ。世の青人草を惠み治め給賜アゆの大詔命なふ。本の御契を想ひ奉きて。天皇命乃大御業を。熟く御覺悟ヨ坐る御擧ふて。理〻とも辱しとも。言はくも阿夜ふ畏き大御心ふも御在るる。ふの神世乃御謂比事は。傳ふ委く註せるを見ぶし。けく翌庚辰ふ。左大臣蘇我石川麻呂比奏言ふ。先祭鎮神祇。然後應議政事と奏さもしこのば。其日やゞて。驛使を尾張と美濃とふ遣して。神祇ふ供る幣物を課せ給アふ由見えゝは。左大臣の奏言は。昨日比大御言をて。歷く大夫さち。百伴の造等ふ問アるふ。八十伴緒乃人〻共ふ。先神祇を祭ひ鎮め。然して後ふ。政事を議ヨ給えぶハ。民比情乃悅び服ふはゞた由ふ申せる故に。其由比奏さもゝと通ゆ。當時は猶頼り〻在し御世ありゝを。其は漢説の參入るえ。應神天皇乃御世比十五年と云アる年ゝり。當年まで。三百六十年ぞうりなるぼく。佛法の參渡きるハ。國紀ふは。欽明天皇乃御世の十三年ゝ有れど。實ゝ。早く繼體天皇

の十六年とのふ年よ。司馬達等とりふ者。佛を持渡て来て。倭國高市郡坂田原ふ住ひて。弘めむと欲おもきど。異域神と號け て信ざるし。欽明天皇ひ御世ふ渡て来しものゝ。蘇我氏のみ代く尊み仕ふられど。世人も固く信ずしと聞えて。推古天皇の御世ふ。聖德太子。蘇我氏ふ與しく尊み給ひ。彼十七條憲法ふ。篤敬三寶云くと記し給ひ。彼道風ひ異しき術ふ行ひて。世人ふ信しめむを為給ひしかど。其ゝり此御世まで。四十年余を經るに。なほ世人の情ハ。神祇の御事を思ひ捨奉らぬ在し故ふ。百八十社伴緒の人ゝ乃。熟く其情ふ知て。かく御對ふ申せはと知らるゝぞみり。此事委くは傳と。出定笑語とふ註せ。そ。因ふ。いにしへこの訓れて。抑古の天皇乃御事ふ御紀乃始ふ。尊佛法輕神道。割生剛魂社。樹之類也。

御祖神社道。。輕を給ふ御性ふゝざりし事ハ知らるゝ。生國魂社の樹を割しめ給ふる類は。一時乃御失みとそ有き。いと上古の天皇等にも。然なうの御失は有乃。尊佛法好儒と云へふ事も。當代の在し趣ふ依て。後ゝり申せふ言にさそ有き。實に此天皇乃大御心みは非ざりゝ。其由下ふ注を見て知べし。

ちて八月ふ。諸國司ふ詔して。戸籍田畝を作しめ。朝ふ鐘と匱と。設けて。下乃憂訴を聞食し。男女の法を定。九月に諸國ふ令せく兵器を修補しめ。また諸國ふ民乃元數を録し給ふるふど。熟く思ふば。民情ふ勞ぎ給ふる御政事ふく。悉理さは御定なり。其詔どもを讀奉るふ。下を惠く給ふ大御心のかど見えて。いと。も有ごき御詔ども有て。中ふ漢風も交さまと。其ゝ用ひ給ふもふ。皇祖乃御道に。斯て二年難ふうるばき事どもふり。なほ下ふ云を見るばし。と云ゝる年の。正月朔日ふ宜ひ出ゝる。改新ふ詔命四箇條ふむ。律令典乃始ふり。聖德太子の作て給ふる。憲法とはいへども。律令の類ふは非ざ。教訓ふ類ふり。故古の御世乃詔命を。令律乃始とて云ふ。中ふ今傳ゝる令の文と。全同ど語さく。其第一ふ有き。

條ふ。罷昔在天皇等所立子代之民處〻屯倉及臣連伴造國造村首所有部曲之民處〻田莊。仍賜食封云〻と有は唐土の郡縣に制を用ひ給ふなり。漢籍通典ふ。唐封公侯無國土。其加實封者則食其所封之戶分食諸郡以租庸調給と有。然まど此を思ひ合せし。然まど此を。天皇命に大御心と決め給ふる擧ふ非ず。中大兄太子に御決ふ。隨せ給ふる御擧ふなる。其は當年の三月壬午に。皇太子らり使を使し。入部屯倉を献まて。奏し給ふる御言ふ。天皇問於臣曰。其群臣連及伴造國造所有處〻田莊。昔在天皇日所置子代入部云〻。及其屯倉猶如古代而置以不。臣即恭承詔奉答而曰。天無雙日國無二王。是故兼并天下可使萬民唯天皇耳。別以入部及所封民簡定仕丁從前處分。自餘以外恐私駈役故獻入部五百二十四口。屯倉一百八十一所と奏し賜ふるりて知ばし。處〻田莊に四字本ふ無に脱らるるなり。今は上より引る文ふ據て補ふ。此は此御世ふ。種〻乃新しき御制に建給ふまど。昔乃天皇等に置給ふる。御子代屯倉を罷め。臣連造等の世〻。有ち来まる田處を召上げ給む事ハ。容易ならぬ御擧なるゆゑよ。皇太子に問まをふ。御答ふ右に如く在しらば。上件改新に詔命を宣ひ出ふまひ。皇太子は其詔命乃まに〻。入部屯倉を召上げて。歸献まを給ふるなり。事の連を熟く思ふに。ふに改新乃御制を。ふ奏さき乃む事ハ云も更ふく。其を天皇一柱に御心ふは決ふ給ひて。皇太子ふ問給ふるを。太子は本らり。鏡子連乃議に。恐み用ひ給ふる故ふ。右乃如く御答ふ坐しりむ。然てもふほ天皇は。御民乃情のいとふ有らむ

と所思食して左右大臣しそ心十伴緒の人くみ民乃情を問しめ給ふるゆゑ心を著て辨ふべし文義と事實ふ心を著て辨ふべし能くく是ふ就て想ふで此御世ふ在し事ども惟神なる例のすにく古道伐修ひ教ふ治え給へ事と唐土風ふ制度とうち交りて見ゆふ中ふ唐風あるは天皇乃御心みは非ざて實を大化三年四月み神名皇名伐人く處くに妄ふ付る事ふ禁め給ふ詔曰に惟神惟神者謂隨二神道一亦自有神道也我子應治故寄是以與天地之初君臨之國也自始治國皇祖之時天下大同都無彼此者也既而頃者云云始治國皇祖とは神武天皇の御事伐詔ふ師云惟神者謂隨二神道一亦自有神道也と有を熟く思ふべし神道ふ隨ふとは天下治え賜ふ御志乃ざた多ぐ神代乃有来しまにく物し賜ひて いさゝかも加ふ給ふふとあるをりふ ひてまの神代のまにく大らかに所知看せば わのおのうら神乃道を足ひく他ふ求むぼを事ふを伐云なり

多カリ。この事現御神と大八洲國をろし看さと申ばも。其御くに世世乃天皇乃御政なる意ふ萬葉集乃歌ふとに神隨云くとあるも同じ意ぞ神國と韓人の申せるしも諸ふぞ有りける。神道と申ば名を。用明天皇紀ふ始めて見え畫きど其は只神をい祭ふ給ふ事を指て云へるゆゑ此あるぞ正しく皇國の道を廣くにして云へふ始めりきふと詔ふる如く。頃者伐猥雜しき風俗を大同ふて。惟神なる道ふ復し賜へむ乃御心なりけむを。傍らり勸え奏せるみ。御心ふらびも。古例ふ變給ふる事も多ふ。この故ふ。彼大化二年八月癸酉伐詔み。卿大夫。臣連伴造氏く人等。咸可聽聞。今以汝等使仕狀者。改去舊職。新設百官。及著位階。以官位叙云くと有ふども。決めて此天皇乃御心みは非ざりけむかし其は改去旧職新云云とあるを。惟神云云と詔ふるとは甚く違ひて。同じ御世の御詔とも所思ざる伐。上ふ論ふる左右大臣しく。民の情を問しめ給ふる詔曰ま

る御紀乃始めを為人累仁不擇貴賤頻降恩勅と有み思ひ合せて辨ふぼし鏡足公傳を輕皇子器量不足與謀太事とあるを此天皇乃皇祖神を孝ひ給ふ御心なる古例を守至民は天神の資物ふる謂を明め坐て其を撫育み給はむ事を御心ししく已命社御ちこのらふ漢風の制度を草給ふ事をどえ然しも宜ありとは所思者ちぐ至ゝむ故にぞ有ばき此を思ひ奉きば孝德ゆゑ謐し奉きるえ實ふ相當きる御稱なりゝまゝ菅家遺誡ふ凡治世之道以神國之玄妙欲治之とも凡仁君之要政者以撫民為本民者神明資也本朝之綱教者以敬神明為最上神德之微妙豈有他哉凡治天下君者因準於先王之法則太古之傳和而治之矣又神孫之皇國乎と書遺し給ふるふも符ふ御行みぐ在りる此遺誡を偽書ふ至とれふ人もある由なきど其を學問乃未しゝれをぞ此を別ふ論ふる物あり

ふほ言はゞ白雉四年社処ふ是歳太子奏詣曰欲冀遷于倭京天皇不許焉皇太子乃奉皇祖母尊間人皇后并率皇弟等往居于倭飛鳥河邊行宮于時公卿大夫百官人等皆隨而遷由之天皇恨欲捨於國位令造宮於山碕とあり是を以て當昔社趣を想ふを恒ふ御心ふ應えばふ事況も堪忍び坐しを其議に任せ給ふる事乃多かりをむと推察至奉らきゝ至公卿大夫百官人等皆とある中ふあり然るふ皇太子ふ諫をも奉らば天皇を捨奉至と共ふ倭ふ遷らきしハ深き思慮なる事ふやゝまゝ間人皇后と申さを皇太子乃御兄弟ふ坐せど天皇乃后ふ坐る後さふに率奉至給べるゝと甚もいぶかしく御所為ふふむ天皇戀しきふ堪給へばを至しと聞えて皇后ふ送至給ふる大御歌ふ鉗著け我ぐ飼ふ駒を率寢せば我ぐ飼ふ駒を人見ばらむゝ御詠はせ給ふ御心のゝどはいのに御ゝむかゝふに皇后も皇太子もふほ歸至給えば翌五年の十月朔日ふ天皇の御病ませる由を聞して皇祖母尊皇后皇弟公卿等をも率て難波宮ふ趣き給ふるに十日ふ天皇は崩御せれを皇后皇太子皇弟等も天皇の御末期をば看給たざ至しふふ至大ゝしゝふ。ちて孝德天皇崩御ゝゝこのば皇極天皇を重祚て高御座に即奉至給ふ。此を齊明天皇と稱し。古風の大

御名を天豐財重日足姫天皇と稱し奉り。前ふ皇祖母尊と稱ず奉らせしを重祚ありしめ奉り給ふるなり。谷川士清記ふ源親房卿言本朝重祚始于此皇極重祚號齊明孝謙重祚號稱德重爲天日嗣之謂乎とのたまふ。然も有ばくや。中大兄皇子えあほ皇太子と坐まして。御政奏し給ひしらば。此御世なる新しき御法も悉く其御心と決め給ひ行む事え云も更なり。實に孝德天皇崩御しあらむあは。直ふ高御座ふ即坐させられを皇極天皇殘重祚ありしめ給ひて。御親ぞ皇太子と坐ませるは。彼聖德太子の久しく皇太子と坐て異國風の新法を令し給ふる御行ふ倣ひ給ふるにて。天皇と坐て八中くふ御心のはしに伊豆速く行ひ給ひしさき由有し事ろまとハ孝德天皇の奉爲ふ漢風の三年社喪を行ひ給ふとしく其間を御母尊ふ天皇の御事殘知らせ奉ふ給ふるめも有ばし。斯て令社典の成きる事を。上ふ引る弘仁格式序ふ。天智天皇元年制令二十二卷世人所謂近江朝廷之令也とあるもど。御紀ふ此事見えず。然もども。其を近江令と云ハ。近江都ふて制き故由なる也。御紀に六年三月社下ふ。遷都于近江と見え。七年正月に高御座ふ即坐る殘宗ふ。右序に元年とあるは七年の事にて。此年ふ作ふ給ふる殘。御紀ふ記し漏せるふく。實は鏤子連社撰定られうるれふ。齊明天皇崩御しあらむふは。直ふ御位ふ即給ふばき殘。六年ぐほど。ふ皇太子と稱ふしめ給ふる事ハ。谷川士清說ふ。天皇在齊明天皇之諒闇三年四年春二月間人大后崩又居喪三年都六年空位とりふ。素服を服きふ由御紀ふ見えもむ。誠ふ然るばし。漢風社三年の喪とりふ事。此ふり始まり。其は鏤足公傳ふ。天智天皇社七年九月の事ふ記せふ處ふ。先此帝令大臣撰禮儀刑定律令作朝廷之訓。大臣與時賢人損舊章略爲條例と有ふとを知ばし。大臣とは鏤足公ふ。時賢人とは高向漢人玄理旻法師ふど形るばし。ふと此を以て孝德天皇

社御世知者に也。直に大連を止めて。左右大臣を置て給ふる事を始めて。天智天皇の御世よりぞ。種々定給ふる御制度の。悉く鎌子連の奏し勧め奉りて。入鹿を誅ひ給らむ後を云云せむと。内々事議られたる定なるこそ。孝徳天皇紀に鎌子連懐至忠之誠。擁宰臣之勢。處官司之上。故進退廢置計從事立云々と見え。また内臣に任給ふる時の詔に。公卿補任に。公社傳にも記せる。軍國機要。任公處分と詔ふは由見え。はた天智天皇社。此公を惜み給ふる御言にも。國家之事小大倶決と詔ふるをも思ふ。上に左右大臣ハ在しかど。鎌子連の權勢に及ばず。趣ふふをや。此事は師も既く論たまふ。天智天皇社殊に用ひ給ふる事も。上に記せは如くはと公の傳に。皇太子毎事諮決。然後施行とのひ。また情好惟篤義雖君臣禮但師友出則同車

並騎。入則接茵促膝。と有をも思ひ合せて辨ふ。また此に公の傳に入鹿を誅はむ策を問給ふる時に。具に其權謀を述べらるるに。りさく悦しく。誠吾之子房也。と詔ふる由を載せ王子房とは。漢高祖と云ひ給ふる王に仕へたる。張良と云ふる者の字なり。彼國人の論に。張良ハ高祖に使ふ。高祖に使ふる謂ある由いふ王。吾之子房也。と天智天皇の詔ふる御言。前に引る書紀の文に。歴試接王宗之中。而求可立功名哲王。便附心於中大兄。と有に。此に思ひ合せたる。實に也。鎌子連を子房に風に似たりとも。また鎌子連の。議を奏されるは。上に論ふる如く。二御代の天皇社。惟神に大同心にして世人の。頃者同らに成来しを教ふ直しく。また後世に臣等は驕傲を高ぶり。蘇我氏の如く。天皇を蔑如し奉らむ事を。豫に押置き給はむ。所思者は。御心を酌察を奉て。至忠の誠心なり。慮を奏さるる事を言はくも更なり。然

ども其議を定られうる事蹟を神祖命の御傳承坐る御道の御規矩みゝ對承合せ熟く視て熟く想承て此公も神事乃宗源を掌せる兒屋命乃裔なるに於ど足たね事ゐ紀皇神の道浮修ひて制度を立む事ゐ奏さまぐり々む餘ゐ漢風を好き過られうと所思ゆる事も多あるは師れ言き事ゐ禍事い継ぎ善事ゐ継ぎ善事ゐ禍事ゐ貴ぶ賤れ男已ゞ静心ゐ此れ唯に神れ御定をのみ畏しと畏すゐ貴せ聖徳太子れ八耳き思ひ取みちを有らめ實は御名ゐ貴せ聖徳太子れ八耳ゐ戒説ども我聴容き給承るうゝ事起て六韜周易を熟く讀して權謀草命れ時ゐ知て明えらきし鏡子連の八意ゐ思慮て定め奏さまる制令るれを深き旨あゐ事ゐ漢風を好まれゐる事は加くも思ひ休めらるれど甚く佛法を好はまうは事は愚昧ゐ已ゞ意ゆは如也心得ぶこき事形り其れ公傳の終みゐ大臣性崇三寶欽尚四弘毎年十月莊嚴法筵仰維摩之景行説不二之妙理示割取家財入元興寺儲置五宗学問之分由是賢僧不絶聖道稍隆蓋斯之徵也となり。

ゝ齊明天皇れ御病乃時みゐ觀音を祈らきうる事見え公の殯られうる時ゐ金の香爐を賜ひて宜しめ給承る哭乃詔に以出家歸佛必有法具故賜純金香爐持此香爐如汝誓願從觀音菩薩之後到兜率天之上日く夜く聽彌勒之妙説朝く暮く

轉真如之法輪とあり元亨釋書みゐ十月十六日薨先數日剃除髮髮とも見えうる此詔に合せ思るに實然も有りむ殊ゐ唐土ゐ學問ゐ遣しゐる僧貞惠し云るは公乃長子ゐなむ有を更る抑佛法乃妖ゐ怪ゐ安ゐる事ハ神れ道うりて言はくも更ゐ公の好まし儒道を以て言むゐも人倫の道みゐ外きて妄説なるを然ばうり扨漢才を在しゐ此道を信られる事は不審きゐ扨祖事ゐ中臣連賀麻大夫物部尾興大連と同ゐ天皇を諫め奉て我國家之王天下者恒以天地百八十神春夏秋冬祭祀為事方今改拜蕃神恐致國神之怒と奏されて有をゝ此みゐ依て想承を大化元年八月癸卯みゐ僧尼を喚集承て詔日し て大ゐ佛法を興し給承る白雉元年十月ゐ始て丈六繡像ゐ造しめ丈六侍八部等四十六像を造しめ二年十二月の晦みゐ味經新宮祭に大殿祭のさゝゐくて二千百餘れ僧尼ゐ請て一切經を讀しめ是夕みゐ朝乃庭内みゐ二千七百餘乃燈を燃して安宅十側等經ゐ讀しめ給承る扨始めゐ種く佛事の多くゐ齊明天皇天智天皇れ御世ゐも佛法を弘通ゐまゐ事の多く見えうるは此も鏡子連の奏ら事ゐるばし假令天皇の御心うり出さうむも官司乃上ゐ處て計從さまる事立ち進退廢置も心儘ゐく殊みえ軍國

機要任公處分とさ〻ゐ詔ゐるものを諫らきもむに所聞者し給
はげ給めや然れど佛法を興されまるも鏤子連の心ゐる事
を論ふし かく儒と佛と我好まきし故ゐ神祇伯を辞びて宗
業をば嗣きざゐ乃王 ゆゑ萬葉集を見るゐ鏡女王と申せる
は天智天皇社御通坐して愛し給ゐる姫王なるゐ鏤子連乃
其ゐ娉まるしうば女王乃わびて玉くしげ覆ふ我安み明く
行ゐ君ぶ名ハ有きど吾名し惜も と詠きしゐ鏤子連和ゐ
て玉くしげ御室山乃狭名葛ぢ寐ざは遂ゐ有ずてよしも と
詠きゐる事見ゆ かゝゐる事をしも宿めく重く用ひ給ふ天
皇社太御心とらひ鏤子連の行といひ此に於多彼ゐ於ける阿
那異しきゐも ゐ不審ゐこの事 ゐ ゐて天智天皇紀十年社處ゐ正月癸卯以大
友皇子拜太政大臣以蘇我赤兄臣為左大臣以中臣金連為右
大臣云く ゐ き太政大臣甲辰東宮大友皇子奉宣施行冠位法度
之事大赦天下 法度冠位之名 と見ゐるぞ律令てゐ名 ゐ と其
具載於新律令 ゐ施行し給ふ事の正しく見ゐる始ゐ ゐの引る文乃東宮
大友皇子奉宣を今

傳はる本どもに東宮大皇弟奉宣とゐるハ後人乃改まる
也 ゐ 今ゐ法度之事といふ文乃下の本注ゐ或本云大友皇子宣
也 と有ゐ依て改ゐ 此餘にも本ゐ大友皇子と有しを大皇
弟と改ゐる処くゐゐ其ゐ鏤足公乃病を問しめ給ふ処にも
遣東宮太皇弟とあきぜ公傳ゐは遣東宮及皇弟とゐゐ是ゐ
ゐ一本ゐは遣東宮皇太弟と改らはゐゐ然改らふ事ゐ深き
謂ある事ゐれど説長ゐ事を別ゐ言ふばし ゐ ゐて新律令ぞ鏤子連社撰定ゐ
ゐ乃む ゐ 新しき御制なゐし故にや くも備らば此御世ゐ
も なほ未行きぜゐし歟 天武天皇の御世に其をゐ更ゐ刊
定らきゐ ゐ 其は御紀ゐ十年二月甲子天皇皇后共居于大極
殿喚親王諸王及諸臣詔之曰朕今更欲定律令改法式故俱修
是事然頓就是務公事有闕分人應行是日立草壁皇子尊為皇
太子令摂萬機と有 ゐ 天智天皇社御世の十年ゐ施行し給ゐ

るなり。此御世は十年までは。既に十年を越えるに。かく初くしく聞え。今更欲定律令と有を以て。能も備ざりし事知ぬし。改法式と有ハいえゆる格式などの事と通ゆ。此事を下に委くく云を見るべし。ちて草壁皇子を皇太子と為えく。萬機を摂しめ給ふ。推古天皇の御世に。既戸皇子乃太子と坐て政を奏し給ひ。孝徳齊明二御世ふ。天智天皇太子と坐て事執を給ひ。天智天皇は御世ふ。東宮大友皇子ふ事執しめ給ふる例ふく。謂ある事と通えなり。其由は既ふ以ふ上ふ論ふ天智天皇紀乃文ふ。大皇弟就ても。と有ハ。後人の非事ふはなきを思ひ辨ふばし。ちて十一年八月は下に丙寅造法令とのふは。前年は二月ふ。詔命せ給ふ旨ふ。此八月ふ成まる由形るべし。いとかく早速ふ成まるハ。彼鏃子連乃定うるを。ふく彼此改め給ふる故ふらむ。其は次ふ引く持統天皇紀ふ。令一部二十二巻と有。えやおく此令と聞ゆふ。巻数も近江令と同きを思ふばし。ちく法令とある法ハ。此處ふてえやろて律の事と通えなり。律を法と云なきを。和漢の旧き例ふあり。

て持統天皇紀三年六月は処に。庚戌班賜諸司令一部二十二巻とあるは。其班賜ふるふて。天智天皇は十年なり。此年まで二十年よやふらむ。然るふ。諸司ふ班ち賜ふるを。かく遅うれば。況て下方ふ文武天皇律令の旨乃行なきを。乃遅かりし事知ぬし。

紀四年三月は下ふ。甲子詔諸王臣讀習令文云くとあるも。其令を讀習しめ給ふる由ふ。天武天皇崩御せる後え。草壁皇子既ふ皇太子と坐れバ。高御座ふ即坐ぬき。三年と云まで皇太子と称せは事え。天智天皇の始給ふる。三年乃喪を行はきしゆ。然るに。其三年めは四月ふ薨まる故ふ。翌年の正月に。御所鷦鷯野讃良姫尊高御座に即坐せり。ちき持統天皇ふ坐なり。故ふ崩の三年をも此天皇紀ふ係られまるると所思ゆ。ちて文武天皇え。草壁皇太子の御子ふく。天武天皇。持統天皇ふ。大御孫ふ坐ふ。ちて同年六月は處ふ。甲午勅刑部親王。藤原朝臣不比等。粟田朝臣真人。下毛野朝臣古麻呂。伊支連博徳。伊余部連馬養。土部宿禰

甥坂合部宿禰唐白猪史骨黄文連備田邊史百枝道君首名狹
井宿禰尺麻呂鍛造大角額田部連林山口伊美伎大麻呂調伊
美伎老人等撰定律令賜禄各有差誰も冠位を署されど文と
有は天武天皇の御世に造定め賜へる歟又更に撰定むばき
由なり敕命も給ふはあらず翌大寶元年三月の下に甲午始依新
令改制官名位號云々と見え六月の処に己酉敕凡其庶務一
依新令云々是日遣使七道宣告依新令為政及給大租之狀云
云君首名説僧尼令干大安寺云々もあり道あど見えざるも未
成竟ざるに以前に豫く其新令に趣を以て官名位号に改め庶
官に務め様諸國に御政の狀をも宣告しめ給ふるあり新令と云

近江令あり浄御原朝廷の令なりと推古
天皇の御世より始めて大德小德あるの冠位十二階を行ひ給
ふはを次くに其階級を改め給ひ此御世に成りしく今傳へる
令典に見える位階に定め給ふまでに御世々に沿革多く
考ふ徵せはた石原正明が冠位通考あり必ず見るべし その全く成きる事は同年八月
に下に癸卯遣三品刑部親王正三位藤原朝臣不比等從四位
下下毛野朝臣古麻呂從五位下伊吉連博德伊余部連馬養等
撰定律令於是始成大暑以浄御原朝廷為准正仍賜禄各有差
と有る。前に敕命も給ふる事を記せる処あはるはほ撰者多
るを此も前に讓ぶ省き記されしく但し調忌寸老
人は令のみまさ成ざるに率しかば律令を預撰める賞み正
五位上を贈られ又翌三年二月の下に下未詔従四位下下
毛野朝臣古麻呂等四人預定律令賞議功賞有て古麻呂博
德み田十町封五十戸を賜ひ前に率きる老人馬養ゞ男等に
も田と封戸を賜ふる事見えたり以浄御原朝廷為准正は天武天皇の御世

に修定らもしうは律令を本書と爲る由なり。但し天武天皇の御世に定ら
きしうる本書はやおて近江令なるこゝ上に辨あるが如しいち
く此大寶の御世に修撰しめ給ふる令を大寶令といひ習ふ
也。同月戊申の處に遣明法博士於六道除西海道講新令とあるに。
其新に成まる令を講しめ給ふる始え。律令の旨を明らかに
法博士といふ法とは法令法律なり
りふ法の義なり。律令は事を云ふ。二年二月の下に戊戌始
須新律於天下と見え。七月乙亥の処に。詔令内外文武官讀習
新律といひ。乙未の下に始講律とあるは。律典を天下に
頒ち。官人にもに讀習しめ。朝廷にて講しめ給ふる始なり。天智
天皇の御世に律を制し給ひしかども。世に公に為給ふる。此時を始とし。いまだ弘仁格式序に前
に引る文の連接に。遠文武天皇大寶元年贈太政大臣正一位
藤原朝臣不比等。奉勅撰律六巻令十一巻。こゝに二十二巻あり。令を。此時十一巻
に約るなり。本朝書籍目録に。令十一巻。大寶元年不比等
集諸博士撰。謂之古令。律六巻。大寶元年不比等集諸博士撰。謂
之古律と見えたり。はゝ下に引く天長
三年の官符にも。十一巻六巻とあり。養老二年。復同太臣不
比等。奉勅更撰律令各爲十巻。今行於世。律令是也。養老元。元正
天皇の年号
ふり。書籍目録にも。各十巻今世行是と見え。下に引く官
符も同ト。此度令を十巻減し。律を四巻益しるなり。故去
天平勝寶九年五月廿日勅書。頃年選人依格。階人高位
不便任官。自今以後宜依新令。去養老年中。朕外祖故太政大臣。
奉勅刊修律令。宜仰所司早令施行云々となり。天平勝寶九年
は。天平寶字元
年にて。考謙天皇の年號なり。此を御紀の文にはなくあゝ。位高
と有を。高位とある邊のみ。孝謙天皇の御母光明皇后は。
不比等公の御女なる故なり。然るに。元正天皇は養老年中に
朕外祖云々と詔ふるなり。

修正更張れしなり。御紀に此事見ざるは。記し漏さゞるべ
からず。類聚國史にも見えたり。然れども養老六年二月の処に戊戌賜
正六位上矢集宿禰虫麻呂田五町。従六位上陽胡史真身四
町。従七位上大倭忌寸小東人四町。従七位下鹽屋連土麻呂五
町。正八位下百濟人成四町。並以選律令功也と有を。上下に引
く書等に思ひ合せて辨ふべし。けだし此御世にはほぼ此後に稱
修撰しめ給ふる令を。養老令とらひ倣ふ歟。
德天皇紀神護景雲三年に。公卿さち刪定を議正請し。此事も御紀に
も漏されど。下に引く弘仁三年五月の公卿奏に見えたり。桓武天皇紀延曆十年三月の下
に。丙寅故右大臣從二位吉備朝臣眞備。大和國造正四位下大
和宿禰長岡等。刪定律令廿四條辨輕重之舛錯。矯首尾之差違
至是下詔始行用之と見え。眞備公は光仁天皇の寶龜六年に
讒景雲三年に卒せ。然れども長岡宿禰は稱德天皇の神
るべ。是なり先なるなること疑なし。かも故とは云へるあらむ。同十

六年六月癸亥詔曰に。覽從三位守大納言神王等所奏刪定
令格四十五條事。穩便義存。折衷宜。下有司並令遵用と見え。
嵯峨天皇紀弘仁三年五月に下に。戊寅公卿奏曰。臣聞垂範訓
人事歸濟世。改制易俗理會適時。寔知道尚沿革。政必裁成。苟或
未弘。豈肯膠柱。以上は文りゝく漢意
心まゝに見るばし。今此刪定令條是去神護
景雲三年議請刪定。而事有不允。寢而莫行。數十年後。乃始頒下。
自爾以降。訴訟逾繁。事不便人。理難取則。今故謹辨可不輒請刊
改。冀合機宜。用遵可久。庶望景化風行。而革弊群生。日用而沐義
俗。弭奸邪。家全緒業者。許之と有。我思ふに。次くに少しは刪
定らまほしけれど。不比等公の物せられる本書を。全改め
ばけり。故に。後までも養老令と稱び來まるべし。

ちて令傳を法令義解に成らる由を。淳和天皇の天長三年十月に大政官符を。應撰定令律問答私記事と有て。右得式部省解偏。大學寮解偏。明法博士。外從五位下額田國造今足解偏は。此額田國造今足てふ人。明法博士にして。其頃までの令の解に。區々なる事を憂ひて。下文の如く解狀に記しく式部省より訪ふ式部省より其事を解狀に記しく大政官に奏せるを受て。其由を以て。官符に記しく官しめ給ふ故に。かく有り。官符は大うの趣に記さはく御ふり。三代格ふと。もばらく官符を讀むは。此意定をとて見し。謹撿舊記。律令之興。年代浸遠。沿革隨時。損益因世。藤原朝廷御宇。藤原朝廷とは。常みな持統天皇の朝廷を申せども。此には文武天皇に朝廷を申せり。其は文武天皇は。同く藤原宮に坐しろをふり。正一位藤原大政大臣。奉勅制令十卷律六卷。博士正四位下下毛野朝臣古麻呂。贈正五位上調忌寸老人。正五位下守部連大隅。正五位下道公首名。從五位上伊吉連博德。從五位下伊豫部連馬養等。○此に大字あるは。見るに便宜のみ。下文も此に倣ふべし。至干大寶元年。修撰既訖。施行天下。平城朝廷。養老年中。同大政大臣。復奉勅刊修令律。各爲十卷。博士正四位下大和宿禰長岡。從五位下陽胡史眞身。外從五位下矢集宿禰虫麻呂。外從五位下鹽屋連吉麻呂。從五位下山田連白金等。○博士等の名。前も今も。御紀に無ざるが。前に引る文と合せ考ふべし。平城朝廷とは。元正天皇の朝廷をいふ。上に引る弘仁格式序を見て知べし。けて律令の撰者をかく多の。ふに弘仁格式序に。此解狀とも。不比等公に係て云るに。此擧は。彼公の奏し行ひて。惣裁と有し故なり。其は父鎌足大臣の業を嗣ぎしなり。此に意ありて。見きしなり。名も。此に意ありて見きしなり。文略義隱。情理難通。即無不由。先儒舊說。而彼舊說或爲問答。或爲私記。互作異同。未詳誰是。後學者等屬意。彼此。每有論決難塞云く。望請命當時博士等。撰先儒之舊說。省彼迂說。取此正義。勅

成巻帙以備解釋。庚俾學者易解與奪莫異者。省依解狀。謹請官裁者。莫異と云はぐ。大學寮は解狀みて。今足の請るあり。者と云ふなり。請官裁と云はまでは。式部省の解みく。大學寮乃解狀を受て請に故ふ者と云ひ。請官裁乃下ふ者と云ふなり。其式部省の解狀を受て云ふ。大政官符の辭ぶを。此旨をもを
く意得く。諸官符を讀み辨ふばし。正三位行中納言良峯朝臣安世宣奉勅依請者。省宜承知依宣行之。天長三年十月五日とあり。此官符。普通の印本。まと集解ふも見えたり。かく宣ひ出て後ふ。右大臣清原夏野眞人ふど十二人ふ。令ゝ解を撰定ぶきとし。勅命を給ひしこそ。天長十年十二月五日ふ功竟て奏進まれど。義解を奏進る時乃表文ふ。その命を給ふる年月を。御紀闕て知ばうらぶ。類聚國史ふも漏奏とらひ。拾ふ天長十年十二月五日と有れど。天長六年ふや勅命を給ひ。ふ。此表文ハ集解首巻。まと普通の印本ふも見えたり。其序乃始ふ。正三位守右大

臣。臣清原眞人夏野等奉勅撰と有て文ふ。臣夏野等言云く。伏惟皇帝陛下云く慮法令制作文約旨廣。先儒訓註案據非一。或固拘偏見。不肯由一孔之中。爭欲出二門之表。遂至同聽之獄。生丸相半。連業之斷。出入異科。念此辨正深切。神襟爰使臣等集數家之雜說。舉一法之定準。臣謹與南淵朝臣弘貞。藤原朝臣常嗣。菅原朝臣清公。藤原朝臣雄敏。藤原朝臣衛。興原宿禰敏久。善道宿禰眞貞。小野朝臣篁。讃岐公永直。川枯首勝成。漢部松永等。撰者等の官位。くはしく黱されあるも。ど。文長ぎれて。今省きて記せるなり。輙應明詔。辨論執議。陳家古壁之文探。而無遺于氏高門之法訪。而必盡其善者。從之。不以人棄言。其迂者略。諸不以名取實。加減悉依法曹之舊云。乃

筆乃削非是臣等新情猶有五劔難名兩璧易似必稟皇明質疑滯云々分爲二十卷名曰令義解凡其篇目條類具列于左也云云歸於天府謹序如右謹案其撰述之趣知ばし表も大の王清公朝臣は菅原贈大政大臣の祖なり夏野公は總裁なれども義解の文ハ多く十一人社人くりの作れるなり序文は筐朝臣乃作れるなり此を施行し給ふる事は仁明天皇紀ゆ由本朝文粹ゆ見ゆ

承和元年十二月辛巳施行天長年中所新撰令義解と見えて其詔曰ゆ宜須天下普使遵用畫一之訓垂於萬葉主者施行とあり是さきの令に傳はる令義解なり今社印本ハ誤字脫文多くなり塙保己一乃彫せる本りと宜し然きど此本も普通の印本も共ゆ倉庫令と闕ける疾令と闕ける文を據ひ集めて逸令と殲ける物有きど倉庫令二十二條の内七條かけ疾令二十七條の内一條闕ける王此くも

令義解社全書傳らびゆる王しを今在るハ令集解社中ゆ擇王出て別ゆ爲ける物ゆ有る王其集解ゆ既く右の二令社闕て有し故なり集解も今ゆ闕ける本のみ傳れ王ける浅讀むにも此集解かゆ多く見ばし書をも必見るばし然るは令典ゆ隋唐社制ゆ本ゆきて撰ける物ゆ多ば其二十代の令も今傳らざきど六典を見きを彼孔仁が十世可知と云ふる如く漢土社古へより令制の沿革きる事ども多く唐令社趣も其ゆり存王く見え其唐令は隋令ゆ或ハ損し或も益して作れる物ゆ多し唐書ゆ太宗正觀二年正月房玄齡與法官刪定律十二卷令二十卷云々と有ゆ思ひ合せて知ら王其をおく皇朝の令ゆ合せく考るゆその取捨損益しきる事の明ゆ知ら王て讀み釋くに便宜きとゆ多くれを例と云ひて西土律令とは云ざれども既ゆ大化二年正月ゆ宣ひ出ける改新乃詔四箇條社中ゆ全く今傳ける令と同じ文乃有て其文六典ゆも見ける王を以て知ばし損舊章とは其唐制を損し搖ける由社文なり六典ゆ依て其損益を考るに皇朝社令も唐令社中に用ゆる王三分を損て七分を採王其に皇朝の故例を合せく制ら王ける王思ける王そは鐵足公の事興めて其子不比等公の養老まで社物せら王きゆ有り

き王。律は十巻あるが。多く失せて。今は律疏と題せるが。四巻のみ残き王。これど。金玉堂中抄。裁判至要抄。法曹至要抄。などと云ふの傳れれば。其間うる條くも。大抵は知らるゝ。何きも塙保巳一氏群書類従に收らり。書籍目録に律疏三十巻となるを心得ざるも。同集解三十巻直本撰とあり。此も今に傳はらぬにて律疏を讀むには。唐律疏義かあるべき見るばし。然るは皇朝の律に。唐律を刊定めて作らるる物にて。名例篇自とも亦全同じ。唐令ある疏は無王しと聞えて。後み義解を撰らきられど。律の疏を本とり在し物あり。其に唐書の刑法志に。自玄齢等更定律令。詔太宗世無所更改。高宗即位。詔律学之士撰律疏と有りて知ぬ。律の名例篇目の歴世次く。み沿革きるとや。杜氏通典。事物紀原などみ見えり。ちて近き頃尾張人の物せる。逸律といふ物に。古書より引きる律の文を。悉く撮ひて。其闕うる文を唐律に拠て補ひうる物あり。便らを物あり。にて此令律に御制を。俗に律令家と稱ひて。漢意の息りて。此典を唯讀み讀み耽る徒あど。古へは尊卑に階級もあり。官職に定るもあり。萬の儀式制度

も何も無王しに。漢土に制度を移し用ひてをり。肇めて然る事に出来しどや。言ひも思ひもさる事あきや。其はいと上古の。神隨み行はれある。道の實事に知ざれをなり。をぢて俗に。国學者和學者あど號する徒いと多うあるどそれ大抵に。萬に本となる。神世の事實をちくも知らぬ。古しやり方ど。今律の出来し頃を王に事を讀みぼえて在かしに。古今事物の沿革を解辨ふ。ちとも。傍らり見るみ難を隔て痒を掻くとろ云ばとき。生くなる説の。言はぬ方で。中くり勝るばく。所思ゆる説に言ひ合ふめり。其はみ古に想ふ實意薄く。神の事實あどをを常世の國の知らぬ堺の遥けき昔語のごや聞成しうふ。生ちのしらの漢意み。本を務ざるは道成るはどに。學問の條理をさ分み辨ずに。真の古に學に要肯を抑古へみ。尊卑に階級いと嚴重ありて得ざる。解學ともをそうし。抑古へみ。尊卑に階級いと嚴重ありし事は。其負ある加婆泥み依て知るく事にく。各國縣里み住ふ國造みを。國造君別。縣主。稲置直あど乃差別ありて。寺正し

く其處く子治め。此を師説ず。古へは國造と云し。今世のごと大ふこそ非ざりしめ。大こと何事も大名の如くなる物あり。國に多く有しなり。其が中に國造君別縣主稲置直などいふ色々の有て尊卑けぢめ有るを大の〻を皆國造と同じ趣なる物みな此色々を一ッふさぢても國造といふ字あること書紀などふ伴造國造などあるは彼色々を凡て一ッみ國造と云るなり。けだし西土れ國なもいみ一ッ封縣の制と云し代の諸侯といふ物此みなく似たり。其諸侯ふ五等乃爵とく公侯伯子男と五きざみの級有し。其は〻國造君別ふどれ色々有しなり。其五等乃中れ一ッの名を取て。支那諸侯と云しも。又支那にて我も國造と云しみ似たり。漢土乃事なれ。彼國れ學さる多徒れ。古の諸侯乃五等れ事あど。誰もとく知れるを。皇國乃古への狀をば。かの字をとく知れる人なくて。國造の中ふかの色々れ等有しを知らぬ。まと彼色々は以このなる狀乃物ありしとも。知らでありまと。朝廷ふ近く仕奉る。伴造るそいうにぞやと訝きうるが如し。

八十友緒ヲハ。臣連首ふどれ差別ありて。級正しく別き。本を王仕奉り来し。職掌の部くを持分て仕奉ヲ紀。臣は大持てふ訳みく其部族を統持れ義連れ郡主てふ訳みく其部の主なる義首ハ人人てふ言ゆく其部の大人ふ義なり。其壁ハ蘇我臣と云れ其部族ふ大持ふ持なる意乃加婆泥大伴連と云れ鞆負部の主なる意忌部首と云は忌ひ事りて仕奉る部の大人なる由乃加婆泥ふり。餘も此み准て知れし。委くれ古史傳ふ云ふ事を。此處ふは大凡を云のみふり。ちて臣れ加婆泥ふる人くれ上みそ。別ふ大臣と云ふ御任し坐て。統領しめ給ひ。大臣てふこをハ。成務天皇紀ふ。三年正月以武内宿禰為大臣也と見ふる始ふり。委くハ傳ふ着て見ふ連の加婆泥乃人くれ上みは。別ふ大連と云ふ御任し坐て。統領しめ給ひ。大連の元年ふ大伴建持ふ延喜式ふる歴運記み仲哀天皇ふる置始ふる由見れ旧か。此大臣大連の人ふ。アと所思也。其由も傳ふ着て見るぢし。

八十伴緒れ棟梁ふる臣とふて。御政事を所聞食し。上にも云へる如く。此大臣大連ハ。後世の左右大臣の如くみて。古くハ臣の加婆泥の人なるでハ。大臣み任ふく事なく。連の加婆泥の人ふて

は大連ふ任ふく事無きを。孝德天皇の御世に大連を止めて左右大臣を置給ふるなり。他加婆泥乃人も大臣に任ぜらるる例となりしなり。旧例は頽き廢れて。やどやどなる神齋の家くの衰亡せること。上にも云へるが如し。されど諸職の定はありて。皇祖通く藝命乃天降坐に時に。天神乃命をもて。諸部社神等を副賜ひて。其職を供奉ることを。天上の儀に如くせよと。御依し坐る詔命に。其神齋に氏人多ち。歴世に其家くの職業を守る。惟神に嗣ぎ仕奉りて。餘りて我が業に勝まる。利ある職に為ることも。其を望み欲する事多く。掌ることを無きし故ふ。各く其職業に精く。人く其分くに安居して。紛ふる事なく。いと美しく在しなり。其職くの部くに。いとく多く。中く傳に其氏くの出ふる処。くに。此處に言盡しがたくも非ず。後に古文委く註せるを見て。辨ふべし。凡て世の亂きに。人乃尊卑に素

そもの格式ふ。職業乃定まらずして。常の心なきを起る事ふく。西戎國乃歴世沿革まて。人情薄悪く。人く其分くに安居せず。上に戎闘ひ。他を冀望みて猥雑しきは。世官に悪ひ。其時に賢人を擧用ひて。此定はりのなき故なり。其は戎人も云へる如く。人としく富と貴とを欲せざる者なく。其を漢土乃古き世の狀ふて。警ずバ。かの諸侯といへる。公侯伯子男社中ふ。男ハ子ふも倒れもふらむと。搆ず。伯も侯ふも公ふもなふらむと欲し。侯公乃徒も。王ふなるとも。搆へ。風としく。王統定まらざ。強き者賢き者ハ。何程にも經上まて運得て。王ふも為らふ。國柄ふ。下として。上に望み闘ふ。常ふ止まず。系脈をば然しも尊ばず。徳ふ尊む由ふて。賢く。擧用ふる風俗なる故ふ。奸佞乃擬王賢人を王くに出て。世を乱せること。彼國社歴史を見て知らむ。此をもて今世の大名ふ。社家くの風儀ふ合せ思ふふ。家中乃家格に世世ふ。世ふ。家老用人番頭武頭。その他家格を重き物ふして。世官乃狀ふ仕ふ。卑しき者を登用ひざる家くに。家中乃風儀厚

くちく整ひて其分くに安居して他を冀ふ心なき様に然る格を乱しつく遺賢なからしめむとやうに卑しきも登用ふる家は家中に徒上らる者も家格を守らむとせば下らぬ者も登用らきむとして詔ひ家中互に犯し侮辱などして風儀乃整えざる事見ても其由を知る事まこと後世に成功と称ひ難く實に八賣官ある漢風乃制ならば菅三品に封事三箇條を辨らき奏るを見て其弊を知ぬく凡て人情として小初位なるに六初位に昇らむと欲し少従の職なるが大従に進むと欲し大従なるは家令なる職に進ふる故に自然に利口佞奸の行ふ事なるを理を熟く思ひ皇神の御道なる然る弊なる事をも悟ず深く思ひ下に論ふをも合せ見るべし然るに孝徳天皇乃御世に其制を用ひ給ひて上に論ふる大化二年八月に詔曰して臣連伴造八十氏人乃舊なる世くに仕へ奉る職を改め去しめて新に百官位設け位階を著て官位を叙給ふ宣ひ出て八省百官を置給ふ事なり惟神なる世官に御制度を甚く草まて皇御

祖神に御依し坐る神裔に氏くは次に古語拾遺を挙て論ふ如く稍くに衰て終に大抵に亡び失る如くなりも成ぬ

○古史徴一之巻

○百九十六

但し漢國なくも古く殷乃代と云し頃まで大かる世官乃制なる周武王に殷を亡ぼす時に紂王に悪る代数へる中に官人を以て世と云へる世官を悪る始なく此武王に時なりして殊に先として徳を尊ぶと云古に猛き事に言いさやぎ野に遺賢なしなど云に賢き代乃ありざれども言ひ立し故に歴世次くに其ぢのしら代用ひ形く隋唐乃制も其定なりしに大化二年に其制に用ひ給ひて右の詔曰に有しなる鎌足公傳に大臣訪求林藪搜揚仄陋人得其官野无遺材所以九官克序五品咸ぢて今に建らまこと諸に有は是に此時の事なり是る職員は郡縣乃制に倣ひて事多くなれる故に新に置給ふるも有きど悉く唐官を移し学びなるには非ず其世職に去られ有きぞ舊なりの諸職に長官と次官と綫別ち位階を配

て制らまるゝ多く。それ諸官名の中に。上代より正しく官職名ありて有しを。漢字を填うるも有り。はと名を古くて。正しく官名あるまるゝ後形るも有り。まと漢字を以て新に制まく。其に訓を付うるも有り。此例をいふ。この言くぐ。師も言旅美と唱ふ。臣といふ尸を。大といふ尸なる氏人に限まる故に。此號を。臣の尸なる氏人に限まる。大といふ言を加へて尊うる號て。連れ尸の氏人に賜ひし号なり。然るに。古の大臣大連を官名と心得るハ違ひ。大臣を正しく官名とせるまゝハ。上に云へる如く。孝德天皇の元年より。左右大臣を置れうるまを始に。官とあまる故に。臣の尸なれ氏人に限らず。他尸の人もあれ。上にて天智天皇の御世に。内大臣まと大政大臣そゝはる。其はゆゝ大臣と云る古への號をやゞて用らまるる官名なるよ。左といひ右といひ。内といひ大政と云ふハ。こゝ漢の風習ひと。はの號ざはあく。古風あるを非ず。然まども。左右大臣れ上に大政大臣を置るく事ハ。景行天皇の御世に武内宿禰命を臣連二多造心ヤ伴緒の上に立て。棟梁臣と称ふ。趣に通え。推古天皇乃御世より聖德太子。孝德天皇齊明天皇二御代に中大兄皇子。天智天皇の御世に大友皇子。天武天皇れ御代に草壁皇子に。萬機乃政事を摂政ひしめ給ふるうに。沿革まる事と所思うう。偖まそ後に。摂政とうふ號も出来れ。かく見て行く。れに。大政官神祇官の官人れ更に言はば。省職寮司その餘れ官くも。上古うう沿革まる官あるまを。トヲ中に二ツ三ツあらでは無ぞかし。其を遂一にみ辨ずむも。いと易き事みを有まと。處狹く煩はしうまで。いひの其例を言のみあるを。あほ職官れ事を。官職秘抄。職原抄。百寮訓要。官職難儀。あど代官位令を副讀て辨ずはしし。○因に云。今そむこの。我が友に藤原蒲生秀實とうふ者なりきまを。藤原秀郷朝臣うの出て。近江國蒲生家の一族なるを。下毛野國の生れなり。カ強く。兵の道をも熟く習ひく。心懶き壯士なりう。十三歳れ時とう。太平記を讀て。北條足利あど。天皇を惱れ奉まる事うう。慷慨の情を起し。學問に志して。世乃並に漢學を為うのしを。皇朝れ古書みも讀わとまて。古さ御乃御世くれ山陵の廢まて。人の知らざる事を悲しみ。かゝ令式乃御制の衰微歎きく。あれ山陵乃ある國く。みれうら經歷まく。辛しく其在處を探ねく。山陵志とうふ書を著はし。職官志とうふ書をも著はしまを。山陵志代板に彫うる時に。已みも

一部憙きまり縁みて、まだ一度逢ていけろ道の事をも語らひ試うるみ。道を周公孔子のみあるとて、なほ生倭魂あり多きを。其後を逢むともせば、三年をかりも過ぐはみ。職官志孔一巻の板ふ彫ある筑持来て逢むといふ。此度は前に逢ず。時とくやうのはまて、已ぶ霊能真柱をも讀うる由にく。此後は共み道多語を相はしゆきは、已諸と云て、ちて問けらくは、子と予との如く交はる。を漢ふてく何と云ぞと問ず。朋友となむ云とはふ。其朋友に交はる趣はいのみを問ず。善を責むるは朋友の道ぞと見えく。互ふ其あ、詩筑、諫め相ふばき物ぞといふ。善を責むる友の有らむ時は心得たと問ず。勿意勿必勿固勿我。そ孔善言を服ふばき物ぞと云ふ。已云けらく、然らば子と予と。善を責、相はぐいのにを云ず。言ふみや及ぶ我を責めむ人を君ぐをと思ひてふむ。中絶ぬれど、再来ぬをと云ふ。然も有らだとてまだ山陵志乃發端ふ。郊以配平天廟以享于祖と云へるは事違ず王瓊杵氏炎見氏なと云へるが。乱名ある由を始え。其非事ども多悉く責めまとと上み論ずる趣などをも語まし。の。甚く畏まて。吾過ちくの。悉く論ひ諭し給ず。書直しくむし。志みも然る過失て多ての。此後は心を懲し。今思ず。職官云て其後て日ぐの如くふ来て。いと瞳しく語相ずるに、猶く

ふ古道、筑辱く思ふ心孔出来て。已若き時ぐり。君の論ひ孔如く。厳しき責を聞うる事ふしく。御蔭ふぐりて。真乃道をもか抜ぐ。辨ずうり。其ふ就て思ふ。戎人も昌言筑聞てを。必拝しふるが有きで。其み本ぐをて。君が昌言み依て。非事を知きる由ふ記して。拝昌言といふ書を作ず。山陵志職官志ふどに記せる。失を改めてむとて。書始りるが。其頃ぐを病ぬ。丈化十一年七月五日になむ身亡ずぬ。其病め保間ふ。ちをく訪ひきるふ。いと危く見ゆふ。興直ずて。唯み古道のなほいまど明ふらばはと云ことを慷慨まく。其を論せども止おぐ。聲高く涙れとして語ふ痛はしさに。已ず訪ふこと。中くみ病み障るばく思ひて。後ふを人しく音ぐうず事をありたちて其職官志の残きる巻くは。近き頃其知人。下毛野國日光山ふる海成僧都と云ぐ費を資て其稿乃片成なるふ。其儘みみふ板ふ彫うるを僧ふぐうも。いと愛きわざあり。此志は唐六典の躰裁ふ倣ひ記せる書ふと。今ふは職官の事を知るふ物ふる。然きど上ふ云へる如ふ誤もはと少の孫ば。其心しく見るばく。已と孔書乃誤ずを利ず正し。上ふ論ずる趣を書き著はし。職官備考といふ書を作まく。むかしの友乃魂筑慰めてむと思ずど。暇ふ得果ちば。偖まと今ふ記さまある條く孔中ふ。

古へみこの類て例ふ條くも彼此有きど。熟く思ふば。戸令田令賦役令に載さる事等を始め。大抵て當昔さの古く。制有し事等ふ。尾を付け鱠ふ加ふ。唐社郡縣の制度ざはみうち合せて。書取て定られまるゐ多かふと所思也。此は熟く古へを學びて知ぢし。予が見得る限り。古史傳ふ其事どもの出さはふ処くふ。まず古への趣を說き徵し。さて今は至て遠く。其を改らきさる趣を悉く辨ふ戎見るぼし。凡て古へを明を學問て。古道ふ本とし學びて。古今社治草經世の趣を識て。古への真の趣と異國の事社入て混れるとふ戎。熟く見別ちて。其を論ひ定むる拳なむ。專要となる務ふりきる。○因て云ふ。漢學者流社中に。伊藤長胤と云ふる人をかり愛きはふ。此人の著社せ。ふ本朝官制沿革圖考。制度通ふどのふ書等は。便宜く書社めさる物ふきを見るべし。まさに吾黨社小子の。漢學をも為ま欲く思はむ。まず此長胤乃著日る書乃悉く讀て後ふ。他書ま度さふ。進み速さふ物ぞ。

但し右社如く論ふ事ハ。ふく書典の學問社上みこそ有ぢ。實はかの改新らきし。郡縣乃制度ど既く廢きて。惟神形る道に符ふる。舊乃封建の狀ふなむ立復まて有ふ。俗の律令家ふどいふ徒社心遲きど。ふ彼郡縣の制度を。慕しげみ言ひ出はそ。いや傍いふ。や。其は元明天皇紀の詔ふ。倭根子天皇乃。與天地共長。與日月共遠。不改常典止。立賜比敷賜覇留法乎云く。と有ふ就て。師乃歷朝詔詞解ふ。此典法を立給ふる。孝德天皇の御世ふる。近江大津宮御宇と云て。天智天皇の御世社事に係て詔ふ。ふは。此事孝德天皇の御世ふ。ごゝも。皇太子中大兄。皇子の。鎌足連と議て給ひてり。御世所為ぢ。まゝ。かばふの。此不改常典と云ふ。萬乃事。改新むるを健き事ふ。まる。漢國風乃御所為ふ。ひて。神代さり有來し狀をそ停廢て。悉く漢國社制ふ。ひて。新に定め給ふる。然るは彼國のも。周の代までの封建社制と云しく。皇國乃上代さり社趣ふ。をさく異なる事も無よ。ふ。今ふ。ひ用て給ふる。秦さり以來乃郡縣社制とふ物ふく。古へとく甚くさは變き。て抑かく漢國風ふは。ひ行ひ給ふる。上方こそ美さく具

ひ備へきるが如くなき實はそ是ぞ中くに朝廷の大御稜威
の衰へ坐ばき基本殘始め給へる物なりて此後ますく〻
臣等の威權おろく盛ふおりて いくとも畏く天皇をも等閑に
思ひ奉るやうに成ぬるに 此漢國風みうおりて
皇國の意を忘きるる物多世くの物知人さちも
只漢國意をのみ思ひく此謂を悟らで世ふ此天皇殘中興
の君とくも心得さめ王けて此不改常典と云ふ事を重
く嚴ふ詔給ふさは はじめ此御制を立て給へ王時より乃
事にそ有ばき然るを神代よりの有來し御制をいとく變改王
まふ御所業あれど王臣百官人天下の公民までも容易く信
服ざらむさやと後よ舊きに復に事もやと萬ふあやぶく
所思食せはかりなるばし斯て其例となりて次く乃御くに世
おのでも必ずの詔給ふ事とは成きるおるばし抑天地
と共ふ長く遠く變ずくと定め給へれども わおろふ五
百年ばかりが間ふやうくに頽きりて行て保元平治元暦文
治の頃さ王天下諸國の有狀ぇまて此常典
ぇきて名のみ存まくたの おろのうはと上代乃形ふあの復王
ふうる皇神ぇ御心多思ふばしあふ畏と記きるよ就て案
に漢國乃封建は周乃代までなれど實ぇ武王が殷ぇ亡せるる
時よ彼ちくのよ心ふ郡縣ふ立ばらむふは諸侯ぇ中に已が

如き反逆人ぇ出てまさと已が子孫も亡されむ事を思さ免る
を其頃諸侯と云きはく殷の代ぇ旧家ふ王故よ其を
罷めて郡縣ふせむとときさで中くに國乃亂とならむ事殘恐
きて止こやを得ず本乃はくふて置ゆむを累して其諸侯を
王已が子孫も亡されむ事のき斯て秦の代とおりて彼始皇と
云へるハ速き性ふまくこの ば此理多知りて周の諸侯を一人
も殘さで亡しく郡縣とは爲給へるる國ふる故よ諸侯といふ物あ王ては大盜出て王位あや
うく郡縣ふては盜人ありとも小盜ふくむ事多思ひてろわ
ざや思はる故漢の代と草きるるる今ふ至るまで其郡縣ぇ
制ぢかりは變改ざるなり斯てさら王位を闘ふ盜人の絶る
らしおく代乃多く草きるとし彼國史多見て知ばし彼國人
あも此理多この ば論ひて封建難復とふ論を著せ者乃
王然るに皇國乃郡縣く天地と共ふ長く遠くと詔い定め給
ひて本の形ふ復さむとは爲給へざまくこの延久乃頃ふど
くるも早く公田を掠むる者も多く愚管抄ふどに宇治殿の
時一の所乃御領くとのみいふ庄園乃諸國ふみちふる由見
えて一ぇ人さと屋斯在しこのば是くる後ふにく郡縣の制乱
きて彫然よ舊の封建よ復きるハ皇神の本ぇ御國ぇ有ごと
ちなるきを此ふ就ても今大將軍家ぇ大名さちを帥て坐し

て其御尾前となりて天下を政す給ふ御有状は以て尊く○
畏く天地と共に長く遠くとぞ祈奉らるるかし。
ちて格式乃典の成きる由は。まず弘仁格式序に前に引る文
に連接す。先帝德侔熹載云く。凝情政體騁想治術以爲律令是
爲從政之本。格式乃爲守職之要。方今雖律令頻經刊脩而格式
未加編緝稽之政道尚有所闕乃詔贈從一位左大臣藤原朝臣
内麻呂。故參議從三位行常陸守菅根朝臣眞道等始令撰定草
創未成遭時遏密寢而不爲。先帝とは嵯峨天皇の御世なりて。
此は決めて御父桓武天皇を申せり。然るに此詔のごとく御紀
にも類聚國史にも見ざれども。大同類聚方も此天皇の遺命
に依りて平城天皇乃御世に成きるかと。姓氏録も上に辨へ
うる如く此天皇の御世に事起り坐て嵯峨天皇に御世に成
きるとを思ひ合せて然は知るるなり。まづ次に引く淳和天
皇紀にある藤原三守朝臣に奏言に文武天皇大寶元年甫制律

令云く式條猶欽云く。先朝延曆年中降綸言於卿相揮折簡於
英髦云くと有るを思ふに。凝情政體騁想治術といふ語も
毎に漢風に申を虚文にはあらず。誠に桓武天皇に為の御坐
乃なり。其八御紀に延曆二十四年十二月壬寅に是日中納
言近衛大將從三位藤原朝臣内麻呂。侍殿上有勅令參議藤原
朝臣緒嗣與參議菅野朝臣眞道相論天下之德政于時緒嗣議云
方今天下所苦軍事與造作也停此兩事百姓安之眞道確執異
議不肯聽焉帝善緒嗣議即從停廢有識聞之莫不感歎と見え
御紀に終に天皇性至孝云く。天姿嶷然不好文華自登宸極勵
心政治云くと見えたるほ御紀に彼此政治に大御心を用ひ給
ふる事どもの見えうる。思ひ合せて辨ふべし。にて格式を御
撰のにて。此御世にこの故ぐ催し給ふるを。御子の朝廷平城天
皇それ御志を紹坐して。はくと曰く物し給ひ久を。天朝以聖承
其由え次條に古語拾遺を引て論ふ浅見ぶし。
聖云く。顧先緒之未遂切業構於宸襟爰降綸言尋令脩撰申詔
大納言正三位藤原冬嗣藤原朝臣葛野麻呂秋篠朝臣安人藤
原朝臣三守橘朝臣常主物部中原宿禰敏久等天朝とは當代嵯峨天皇を申

せり。桓武天皇の御世に格式の典を撰定のうへ、詔命せ給ひきと。時の過密に遭ふく、草創なほ及ばざりしを。嵯峨天皇の御世に、その先より遂ざりし事を顧て坐て申給ふ冬嗣朝臣等六人に詔命せ給ひる由なり。其年月は御紀闕て今知るべからず。けて此撰者うちれ位署委く署きられど文長々れば省きて引るるなり。上遵叡旨下考時宜採官府之故事摭諸曹之遺例商略今古審察用捨以類相從分除諸司以上格式の撰定せらるる様自此為格雖非奉勅事皆稱大者奏加奉勅因而取焉若屢有弛張向背各異者略前存後以省重出此一節に格を撰定せらるる様自此之外司存常事或可裨法令或堪為永例者隨狀增損惣入於式此一節に式に關る文なり若事類雜不得指附者各為雜篇次之於末は雜式雜格の篇を設らきらる由れ文なり其諸司所行彼此參差或因修雖久不便

於事若斯之流難以取則具録其狀伏聽天裁諸司の行ふ參差なる事則と為ざるべく、撰者うちの心とは捨ぶく、其狀を録しく天皇の御裁を待る由なり。至如米鹽魚肉兩數紛紜及鋪設雜器功程多少等類事既輕碎臣等商量務徒折中不煩上聞此に諸行事に用ふる色くの物の両數輕く碎き事なる故に鋪設雜くの器物なども此類の事ハ者うちれ商量まて記せるると云ふなり。撰其朝會之禮蕃客之儀頃年之間隨宜改易至於有事例具存記文今之所撰且以略諸朝會之礼とは即位朝賀を始め其他朝廷あく行はるる礼式か此内裡式新儀式などよ記ちきうる礼式此類をいふ今傳はる内裡式やうのて此御世の典なり此事に次に云を見るべし蕃客之儀とは蕃人の參来ある時に其を饗給ふ儀式を記せる書の事を聞ゆきど今傳はらざるにて古此二ツに頃年宜に隨ひて改易ありくやうなる例に別に其よせる記文ある故に今乃撰ぶ其を器うると云ふるなりにて次條に引く貞観式序延喜式序に依て考ふに此時の由

ざ祭祀の礼ハ記文無まゝと通也。此事も次條ふ参く論ふ見るべし。又交替式者延暦年中勘解由使撰定奏聞遵行已久。仍舊而不加取捨。此式を撰きる事。延暦の御紀ふ見えぞ。他書ふも未見當らぬ。まゝ今世ふ傳はらざる書ふ。然きども。政事要畧よりて多く引ふるにて。其趣を見るふ。内外乃官人等の交替きる式を記せる物ふて。式と云ふ。格と云ふ類ふ。貞観格序ふ。内外官交替式也ゆるも。同じ類と通え也。聖武天皇紀ふ。天平五年四月辛丑の処ふ。制諸國司等相代向京。或替人未到以前上道。或雖交替。記不自解由。因茲去天平三年告知朝集使等已記。然國司寛縱不肯遵行。仍遷任之人不得居官。無職之徒不許直叢。空延日月。豈合道理。國司官知状。遷替之人。必付解由。申送於官。今日以後永為恒例。と有。かゝる事の有。故ふ延暦年中ふ。此式を撰ぶ始らるゝ。しかるべし。しかして本朝書籍目録ふ。交替式二巻。延暦年中勘解由使撰之。奏聞とあるゝ。此文ふ依りて記せるふて。當時こ式書を見て載也ふ。ふゝ非ざ。こ式書目ふ載也ふは。こゝる事多こ。心しゝて見るべし。但年代浸遠。京都屢遷。諸司文案。多或墜失。雖加採索。猶有未備。次條ふ委く辨ふる如く。式ハ記文ふ。文武天皇乃御世ふ。元明天皇の御世まで。百年ばかりゆ。間ふ。都を遷されしふ事五度ふ。其度ごとふ。文案の紛失ふる由と聞えぬ。上起太寶元年。下迄弘仁十年。都為式四十巻格十巻。上起大寶元年と云ふ。大寶元年ふ。大寶元年ふ。弘仁十年まで。次ふ記せる文書を撰び集めて撰きる辞簡而事詳。由ふ。なほ次條に標して委く云ふを見るべし。文ふ約而旨暢。庶使覧之者易暁。施之者易行云々。臣藤原朝臣冬嗣等奉勅撰とあるゝ。此序を本朝文粹に。弘仁格序とあり。他書ふ。格式序とあるゝ。正しき。故弓ゞ書には。弘仁格序とも。弘仁式序とも。弘仁格式序とも。處れ趣ふ依りて標せり。ふゝ下ふも云ふを見るべし。此格式ふ奏進きる年月ハ。御紀ふ闕て知ぬこゝ。ふ。此文ふ迄弘仁十年といひ。貞観格も貞観十年ふて成載ゝて。同十一年ふ奏進きるを案ふふ。弘仁十一年の春ふぞ進上きむ。

但し其月日は知ばらき由なし。後作の日本後紀ゐ。弘仁十年に係て記せるハ誤なり。○因ふ云。後作乃日本後紀とは二十巻寫本なて行なるし。日本後紀の事なり。此ハ真乃後紀ハ早く失て傳らざる後世人ハ後紀ゐ擬ヲ他古書を集て撰きる書と見えて。採用ふたる事多うの。かき予ゞ書等みは。姑く後作日本後紀と號けて。引用ふる事なり。真の後紀ゐ非ざるを以て。其記せる事等を悉く妄説のごゝ思ふ人も有きど。其は思慮ヲ不委しゝ。ざるなり。此記乃ちくて別ち。委く考ヲ記せば物なり。其ハ此を施行し給ヲる事ハ。下ゐ引く貞觀格序に。弘仁十一年四月廿一日ゝ有きでゐり。但し貞觀格序に。弘仁十一年四月廿一日施行格十巻とのゝ云ひしく。式の事を記げるハ。格ハ序なる故ゐ言ひ漏せるならむ。まゝ若くハ。格のみ此時施行し給ヲるゐも有ばし。ちて類聚三代格ハ初發ふ。此序ヲ載せて。只ゐ格式序とのみ有ヲ。文にも。弘仁格弘仁式とは言げる ハ思ふに。其成きる時ゝ。唯み格と號ひ式と稱ひて。弘仁てふ言ハ。冠せげヲ

乃む多。貞觀延喜ハ対ヲ對ヲて。後ゐ弘仁字ハ冠せ〜ゐらむ。貞觀格。延喜式と號けて記されらり。ちて右乃序文を熟く視るに。格式序と言ひて。格と式とゐ兼るれども。式ハ主と爲らきるの。然るハ。格を撰定しる躰裁の事ヲ云へるハいゆゝ麁く。式ハ事乃委をれば形の。故考るゐ。此は弘仁格式同時ゐ成て。中ゐも式ヲ撰給ふらゆゝ。專要と有し故ゐ。其事を專と述て。格の事ゝ其ゐ隷て。然しも委くハ述きざるゐ形ヲ。貞觀延喜の度く序を附られしらはの。弘仁のハ。都爲式四十巻格十巻と。式と格と別ゐ云ひて。式ヲ格を附られしる狀なるヲ思ひ合せ。まゝ次に引く。上延喜格式表とある。格ハ事ハ。貞觀格序と。延喜格序文の事をも思ひ合せ。ゝ。ば。ゝ。委曲み記されるの。其は清和天皇紀ゐ。貞觀十一年。四月

十三日庚子撰貞觀格畢。大納言正三位藤原朝臣氏宗南淵朝臣年名。大江朝臣守人。菅原朝臣是善。上毛野朝臣永世。紀朝臣安雄等。詣闕奉進。撰者。ゝち六人の位署は。其都序曰。律曰。斷罪須引律令格式正文。令曰。犯罪未斷決逢格改者。然則格者律令之條流。政教之輒軌。君與百姓共之者也。格者律令之條流といふ語。をく心得れくべし。君不可失之於上。臣不可違之於下。出言而千里斯應。含和而萬類曲成。をく如此なるとは。上下をく應成ふ理なれど。後ふるを。然もおよ御世も有しハ。いと悲しきや。時險則峻法以取平。時泰則寛綱以將化。我國家遐邇承德。天下無慮。風教大同。車書共道。而未能焚符破璽。施無事於群情。設象除刑。馳不犯於比屋。下に引く。延喜格序乃發端も。此と同じ義の文云を合せ見るべし。誠や。皇朝乃中世ゆゑも。少の亂まつは無きも非ずと。唐土此世くの亂まを示比ぼをく。風教大同。車書共道とぞ云ぼ。のりをふ。故嚮者弘仁十一年。四月廿一日。施行格十卷。此乃公卿百官奉詔。簡舊史之凡要。抄新制之大綱。推民意而分規。量時宜而立範。不刊之典。遵行眇焉。仍舊之圖。蹤跡斯在云ゝ。如今時歷五代。年及六旬。嵯峨天皇の弘仁十一年より。清和天皇乃貞觀十一年まで。五代五十年ふ。然まを六旬とあるを誤りふり。然まど。三代格。本朝文粹も共ふかゝあり。文質暗遷。沿革自至。詔草盈於臺閣。文案溢於縹囊。非所以法止滋章。令除頻變。即詔。故右大臣贈正一位藤原朝臣良相等。古孔詔命せ給ふ年月。今知ぼ。ふゝぼ。次。條々。令因修舊格。綜緝新符。未及成功。歲月遷往。大納言正三位臣藤原朝臣氏宗等。前與右大臣。共承冲旨。詳悟深規。仍與臣南淵朝臣年

名。臣大江朝臣音人。臣菅原朝臣是善。臣上毛野朝臣永世。臣紀朝臣安雄。臣南淵朝臣興世。臣大春日朝臣安永。臣布瑠宿禰道永。臣山田宿禰弘宗等。撰者〻〻。位署を記せず。上起弘仁十載之明年。下至貞觀十年之晩節。撰成規於州郡。搜故實於官曹。事與先格異者。擧而取之。理與舊制同者。推而棄之。凡格者蓋以立意爲宗。不以能文爲本。故省其繁麗之文。增其精微之典。隨官分類。先勅後符。概皆據古之前摸。非爲今之新意。唯一部之內事有兩存。頗涉重構。不以爲例。弘仁十載之明年。是歟。是歟。弘仁格は。弘仁十年の晩節よりを載せ〻く。十年の春進れるこゝを明かに知られたり。まと凡格者。以立意爲宗。不以能文爲本。と云へる語を心留めきて。格を見るばかりに。官分類云〻。と云へるを以て。弘仁格も貞觀格も。下に擧こゝる延喜格の目錄と。同かゝる事を知るべし。勘解由使所奏。新定內外官交替式所載數事。亦復准之前例。不煩取捨。交替式の事。弘仁格序に註あり云へるこゝろ。此に新定〻〻あるを御紀に。貞觀十年閏十二月廿日己酉。新定內外交替式二卷。撰修畢。就敕頒天下。並令遵行。とある交替式。みそ有りけむ。て本朝書籍目錄に。新定內外官交替式。貞觀年中。勘解由使撰。之。奏聞。と有て。卷數を記さゞ。彼は此の文に依て載せるこゝを疑ふ。臣等雖非明于温故博於前聞。猶欲令之必行。禁之必止。賞一人而海內欣。罰一人而天下懼。謹因詔撰貞觀格十卷。奏聞若理輕作格。事不足爲儀。事棄之如遺。兼取之似碎。更撰爲兩卷。同以奏上。准開元留司格號。貞觀臨時格。開元とは。西我の唐。玄宗と云へる年号。彼が時に撰れる格と聞えこゝに。司字を守と作る書も多かり。并て一帙十二卷云〻。但前格存而如舊。後典續而增新。覽古知今。斯焉在矣云〻。謹序と見え。此は須ち給へる事は。九月七日辛酉の

下に。新撰貞觀格十二卷。頒行内外。となる。まゝ此後。醍醐天皇
延喜八年。延喜格を奏進しめ給ふ。此は下に引く序文に
七年と有るに依りていふ。其月日は。知ばるべき由なきに似たれども。次
條に引く延喜式序に。延喜五年八月詔して有れば。其同時なる
日本紀略。延喜五年十一月の処に。施行延喜格と
有れば。此を誤り傳へたるなり。序文に。其序文
に。寒温天道所以成歲。政令寛猛。人君所以導民。隨時立教。或草
或沿。觀風制法。世輕世重。然則金科玉條。不可用之於龐厚之俗
云々。若不達變通之道。則何辨理亂之方者乎。我朝家道出混沌
云々。無爲之功未假號令。不言之化豈用章條。於是朴往彫來。歩
盡驟至。前帝後王。雖俱存一面之細。重規疊矩。不能廢三章之科。
故教而不誅。制甲令於先誅。而不怒張丙律於後。以上は文義は
寒暖と温なる

と。入替はるく歲を成すなり。天神は道ある政。政令も或は寛に或
は猛に物し給ふは。人君乃民を導き給ふ所以なり。時に隨ひ
て教を為て。或は草に沿し。風を觀て法を制す。世輕く世重
くも。物し給ふなれば。金科玉條と云ばゝ教令も。
龐厚き俗に用ゐるべからず。若さの變通の道を達せざるも。何で
亂を理むる方を辨ふべきぞ。我が朝家乃道は原て。天地の
まゝ混沌なる時より出て。古は無爲なる功號令假らずして行
はれ。言ひ教へなくして化さまゝ。豈章條を用ひめや。
是在み漸くに朴なるを往て彫るに至る故に。歩
物し給ふ政を。驟おせども人心乃後に。得ざる故に。前
帝と後王と。御政事は俱なれども時に規矩を重疊て。三章
ぞ。のの科は廢め給ふとも能ざる故に。教へて誅ひ給はゝ
ゝ。先み令を制て設けて。示し置て給ひ。誅を多くして。恨む
まゝ。後に律を張行し置き給ふる物ぞとなる。律令を
制て給ふる旨趣なるを。心を用ひて讀み辨ふべし。不能廢三章之科とふる文
は。漢高祖とゝ云ひし戎王が。秦乃世と云ふを亡して後に。法を三
章に約めるを。皇朝に用ひ給ふ制條乃。少き由を言ふなり。皇朝の律
を唐律明律と合せ見て。それ御制乃輕きとゝも。漢人のごと

重罪を犯す人の少き事をも辨ふべし。彼國に律を見きと。皇國人にして曾て思ひ設けも為まじ行ふ徒の多有と見也。是を以て皇國人と漢人とに厚薄善悪を知る辨ふべし。此は或儒者も早く云ふ所也。近者弘仁格十卷。貞觀格十二卷。亦是聖主降其綸言。賢臣施其筆削。搜舊章於臺閣。擇新制於詔命。察此民情。適彼俗化。云々。制格以來。歷年漸久。或數代之中。弛張屢變。或一事之上。抑揚迥殊。或同本而異末。或分源而會流。斯乃雖協其時宜。匪故相反。而綜其事迹。無所適從。爰詔左大臣正二位臣藤原朝臣時平。臣藤原朝臣定國。臣藤原朝臣有穂。臣平朝臣惟範。臣紀朝臣長谷雄。臣藤原朝臣菅根。臣藤原朝臣興範。臣三善朝臣清行。臣大藏朝臣善行。臣藤原朝臣道明。臣三統宿禰理平。臣惟宗朝臣善經。臣善道朝臣有行。臣弘世連諸統等。撰者〈うち十四人の位署は例の省きて引くるあり〉。憲章前條。綜緝此典。起自貞觀十一年。至于延喜七年。其間詔勅官符。搜抄撰集。除其滋章。刪其煩雜。若粗述先格。事有增損。者據而無遺。若改弘恒規。理無補益。者廢而不採。以官分隷。以類相從。皆依舊目。無加新意。亦其條貫糅錯難為區分。者准之雜令。便號雜格。勒為十卷。曰延喜格。又有理非大典。政出權時。雖不足為龍鳳之銘。而猶可恨雞肋之棄。如此之類。別為延喜臨時格三卷。合為十有二卷云々。分篇章由前摸。不敢殊制。臣等專存温故之意。頗立改弊之文。云云。謹序。

この序。此序も。類聚三代格。本朝文粹などに見えたり。其は第一卷に神祇中務。第二卷に式部上。第三卷に式部下。第四卷に治部上。第五卷に治部下。第六卷は民部上。第七卷に民部下。第八

巻ハ兵部。第九巻ハ刑部。大蔵。宮内。弾正。京職。第十巻は雑格。外ハ臨時格。上下となり。但し世ハ多く本多の至り。此目録の形を弘仁貞観の二格も。かく社如くて此目は延喜格社みならざ。弘仁貞観の二格も。かく社如くありしや聞ゆ。其を弘仁格序に以て類相従。分隷諸司とらい。貞観格序に。随官分類云くとらい。此序文に以て官分隷以て類相従皆依旧目。無加新意とらい。分篇宰由前摸とも云へる歟。以て知ばし。此を施行し給ふ事を。日本紀略。延喜八年十月社処に。被下可施行延喜格之宣旨と見ゆ。よく同書に。延喜五年十一月の処にも。施行延喜格とらふ文あるを。誤りあるさと上より云へるが如し。そもく格の事。弘仁より以前の御世社御紀どもにも。彼此に見え。類聚国史に。元明天皇和銅六年。夏四月戊申。頒下新格并權衡度量於天下諸国とのを。但し此事御紀には見えざ。桓武天皇延暦十六年。六月癸亥詔曰云く。刪定令格四十五條云く。宜下有司並令遵用なども見えども。其はいかゝ社事ありし歟。弘仁より以後に。全く撰集め給ふ事とあも成ふ。ふほ次條に式の事を記しにけり上件。弘仁貞観延喜三代乃格。共に今傳はらぬ。此三格を一に都あるゞ類聚三代格あり。撰者を誰人と云ふや詳ならず。書籍目録に。三十巻を見えども。彼書目に載る書社巻数を。信ぐと社事とも有まじど。此ハ信ふふべし。其は弘仁格十巻。貞観格十二巻。延喜格十二巻。合せて三巻。今存ぬ傳ふ。纔に一。二十四巻を類聚する書なる。三。五。七。八。十二。社七巻のみ。世に行はる。本を。大抵五巻江戸社御旗本に。日下部那佐勝皋字久左衛門と云ふる人有まして。政事要略を始め。其他の古書に引く。存ふる格社文を撫ひ集めて。格逸と號ふ。よく塙氏の。ふほ諸書ふり。三代格乃文を拔出て。補ひ。ふるが四巻あり。是いと宜き物に。三代格に添へ抑く令律式に載さふ。御制は。動はぐくと置て讀ばし。

構らまくは御法なれど。格と當時くふ宜ひ出る御制なる故
ふ。御く世く政事の沿革況知るあは。此ふ熟く辨ふふふ越
ふる事ふし。たのれ神祇令ふ以下の要とある諸令を採て
乃詔勅宣符ふ引隷け其沿革の様を解明えて制度通考とれ
ふ書を撰らむと思ふ。暇ふく得果さべ。けて律令
と格式と乃差別の心得ふ知ふ置ばき事なり。其ふ法曹類林
ふ問謂令謂式共行立之文朝参次第也云く何恣以式文偏孫
朝参行立之次第以令條判他處文書之署所哉彼令條者言階
級之上下不分官職之次第也因茲令制此式文也然則縱雖臨
時集會之所何乖式文以可書署書哉云く答令式之文是炳然
誰称臨時之所哉今以朝参行立之次第因准他所文書之署所
文兼兩方疑難一決偏欲依式文則可背令條尚欲歸令條又似
破式文是以廻准擬之法永比附之文式者守職補闕之制也不
渉他事令者文義普通之典也旁載衆務以始明終以終明始引
彼明此引此明彼者也云く故格式云律令是為從政之本格式
乃為守職之要者朝廷行列雖全式文臨時所文書之署所須准
擬令條以依授位前後也至式文者無可比附法之故也就中雜

律云違令者笞五十別式減一等者爰知式輕令重者何閣令條
強執式文哉云くと有を熟く讀て前後ふ引る書等ふ式則補
闕拾遺とりひ或は別式といひ條流と云ふるも云ふる令ふ對
ふて比語ある由を辨ふ悟る法曹類林と書籍目録
ふ二百三十卷法曹勘文類集加通憲令案藤通憲撰と見ふる
如く法曹家の勘文ふ類聚しまる物なるが今ハ只二卷のみ
存ふて群書類従ふ収ふり。けて三代格を讀むふ。政事要畧。朝野群載類
聚符宣抄ふ。かなくに添置て直てくく讀ばし便宜さと多有き
な形ふ。書籍目録ふ政事要畧百三十卷記公務交替國文糺彈
雜事至要臨時雜事等惟宗允亮撰と形ふ今傳はる卷
卷取集めて二十三四卷ふて無を塙氏ふ藏らはも二十七
卷ふて世ふ珍しき本ふ。朝野群載は序に予曾無拾芥之
智唯有守株之愚多集反故之體以為知新之師部類成三十卷
号曰朝野群載可謂不昇青雲高見紫宮之月不出一室遥知万
邦之風但憖耄及拙編次惟埴疎渉獵以捐後昆宜補前闕干時
永久之曆丙申之年善家竿儒為康抄之とあふ書籍目録ふも
三十卷記作文書札等躰三善為康撰ふ有きとも今傳はる処
ふ七卷闕て大抵二十三卷ふてはふ。此書作文書札戕多

く載せれど。文筆は書み類まど。官府ふ預まる文多く。雑文の中みも。田地賣買券の事あぜ見え。其他種々の事を見得らる。書形は。符宣抄は。一名を左丞抄ともいふ。三代は格ふ洩らる。當頃乃格文を摭ひ集め。延喜より後。延久の頃まで の符宣ふ類聚して。ちゆ十巻ふるが。二五の巻欠けて。今は八巻傳はれ。巻ごゆに。保安二年ふ書寫は奥書有りて。十巻乃末に。左丞抄八冊。十冊之内。第二第五欠。右代々雖令傳領。依歴年序。毎披見。弥恐古本之破損。新寫之文字不審等。只如形令似之。或以朱加愚意。蓋此記者為祢家之秘本。於他家所持之輩。一切不聞之由。厳君之命也。因茲秘而猶不出。窓外後葉之外。者輙不披見。若後生雖有懇望人。深藏筥底。莫免他借。于時元禄第四辛未閏八月廿七日起筆。翌年正月廿二日書寫。比校畢。左大史小槻宿祢書判とあり。然まれば。比く小槻の一家ふ傳まる書ふて。元禄四年ふ寫し直まる時。既ふ二五は巻ハ欠て有りまる。甚もやごゆなるを書形まれば必見ふ。

国立公文書館
National Archives of Japan